

### 3. 遺構について

1号墳 2段築成の方墳であり、今回の調査でみつかった古墳の中ではもっとも大きいものです。墳丘は、一辺が14m、下段の高さ70cm、上段の残存高70cmを測り、その周りには一辺が17.5m、墳丘裾からの幅2m、深さ70cmの周濠が巡っていました。墳丘の斜面には、直径10~40cmの河原石が敷きつめられ（葺石といいます）ています。下段と上段との境目には幅が60cmの平らな部分が4辺にあり、円筒埴輪が立てられていました。後の時代に墳頂が削られているため、死者を葬った棺などの施設はみつかりませんでしたが、上段の斜面にも円筒埴輪のかけらが転落していたため、頂上にも円筒埴輪を並べ立てていたと思われます。また、周濠の中には、死者に対する祀りの跡がみつかりました。西側の周濠からは須恵器や土師器の他に、滑石という石で作られた、紡錘車と呼ばれる製品が出土しました。北側の周濠からは、馬の歯が1頭分みつかります。これは1号墳に葬られた人物の道連れとしてささげられた（殉綬といいます）馬であったのでしょう。また、墳丘の南西角に地割れがみられたり、南辺の東半が地滑りによって損傷を受けており、慶長の大地震（1596年）の影響が色濃く残っています。出土した土器から、5世紀後半に造られたと考えられます。

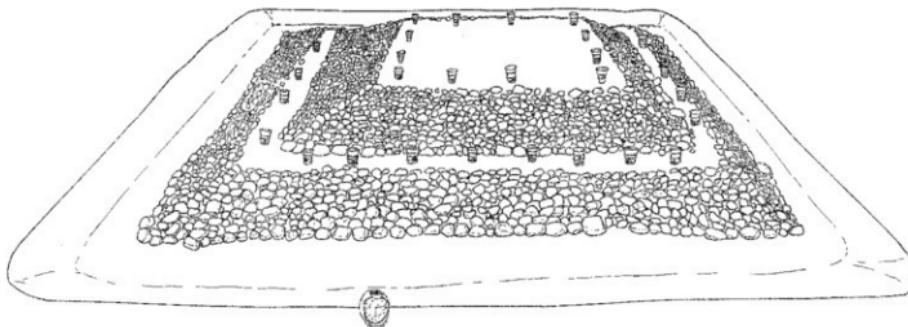


図4 1号墳復元図

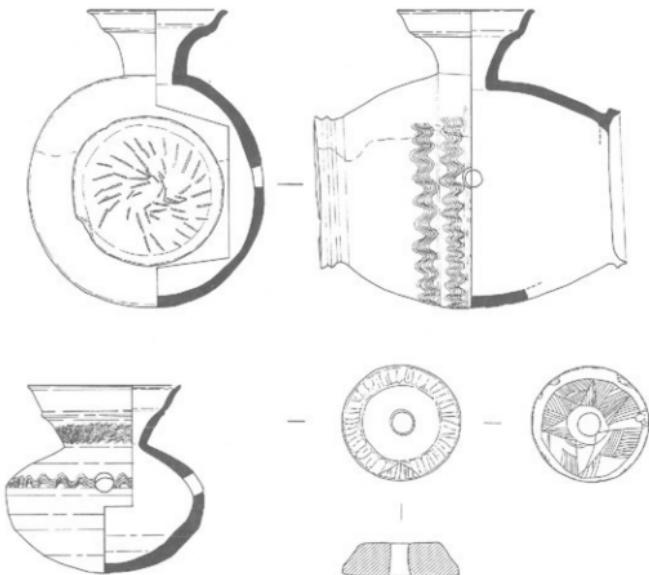


図5  
1号墳周濠出土遺物  
(S=1/3・  
紡錘車は2/3)

2号墳 墳丘の一辺が10m、残存高50cmを測る方墳で、一辺が12m、墳丘裾からの幅1m、深さ40cmの周濠に囲まれていました。葺石は無く、埴輪もみつかっていませんが、周濠の南東隅付近からは須恵器の壺が、南北側からも須恵器の蓋坏、高坏がみつかりました。壺は、周濠の外側斜面からみつかったため、周濠の外に供えてあったものが洪水などで溝の中に転落したものではないかと思われます。出土した土器から、5世紀後半に造られたと考えられます。

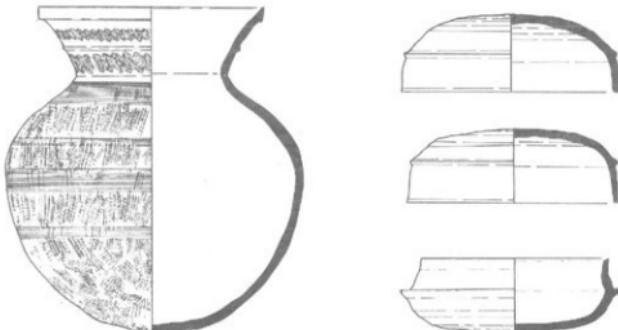


図6  
2号墳周濠出土遺物  
(S=1/3)

### 3号墳

墳丘の一辺が11.5m、残存高1.1mを測る方墳で、一辺が12.5m、墳丘裾からの幅1.3m、深さ50cmの周濠に囲まれていました。変則的な2段築成をみせており、北半分は1段、南半分が2段の墳丘を持っています。墳輪は無く、葺石は四隅と、南半分の斜面の上段にのみ施されています。墳頂には、北側に木棺（長さ2.5m×幅60cm×深さ15cm）、南側に河原石組みの石棺（長さ2.2m×幅40cm×深さ27cm）が、東西方向に向けて並んで据えられており、木棺の北隣りには鉄刀が1振、棺と平行に埋納されていました。周濠内には、南、北、西辺のそれぞれで須恵器・土師器が出土しており、南辺では紡錘車が1点出土しました。出土土器より、5世紀末～6世紀初頭に造られたと考えられます。

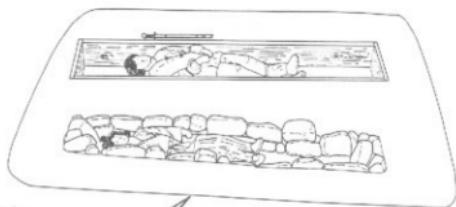


図7 3号墳主体部復元図

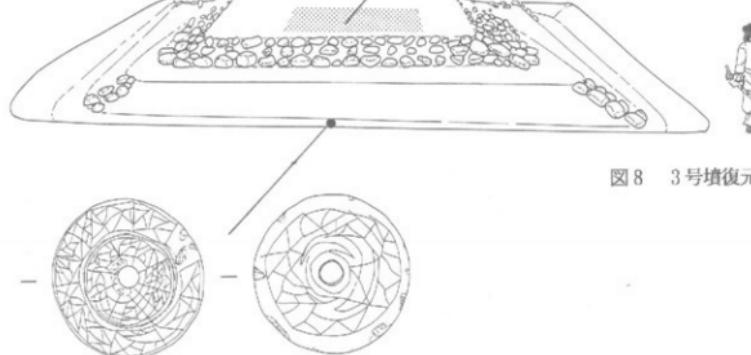


図8 3号墳復元図

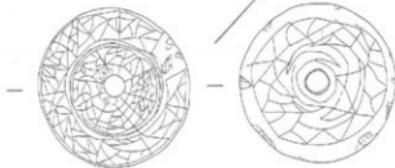


図9 3号墳周濠出土紡錘車 (S=2/3)

#### 4号墳

墳丘の東西が11m、南北が4m以上、残存高80cmを測る方墳で、一辺が12m、墳丘裾からの幅1.5m、深さ95cmの周濠に囲まれていました。墳丘の頂部には、約2.5mおきに円筒埴輪が立てられていました。この古墳は南側が調査区外に外れており棺などの埋葬施設は確認できませんでした。周濠内には土器などの祀りの跡はみつかりませんでした。出土土器から、6世紀前半に造られたと考えられます。

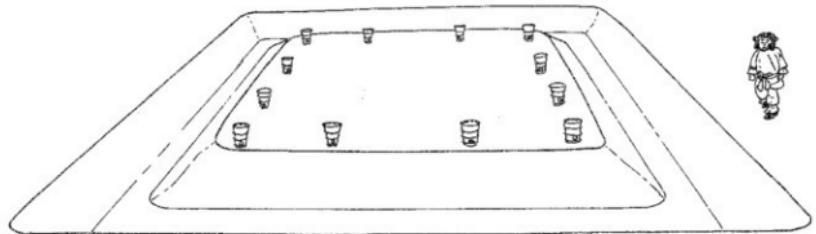


図10 4号墳復元図

#### 5号墳

この古墳は、後世の洪水、耕作などによって墳丘が完全に削られてしまっており、周濠のみで存在が確認されました。周濠は南北が10m、東西が8.5m、幅1.7m、深さ45cmを測ります。周濠の南西角からは、脚部を折った土師器の高杯に須恵器の蓋坏が据えられた状態で、3セット出土しています。古墳に埋められた死者に対する捧げ物を入れた器でしょうか。その他、円筒埴輪も落ち込んでいましたので、墳頂に据えられていたのでしょう。出土土器より6世紀前半に造られたと考えられます。

#### 6号墳

5号墳の北隣りでみつかりました。この古墳も5号墳と同様に、周濠しか検出されていません。周濠の規模は、一辺7m、幅80cm、深さ20cmです。西側の周濠からは、祭祀に用いられた土師器・須恵器がまとめて出土しています。出土土器より6世紀前半に造られたと考えられます。

#### 7号墳

5号墳の西側周濠と切り合った状態でみつかっています。墳丘は削られており、周濠のみが検出されました。周濠の規模は、一辺12.3m、幅1.2~1.8m、深さ25cmです。これまでの住吉宮町遺跡の調査でみつかった古墳には、互いに重なり合って造られている古墳はごくまれであり、この古墳は、周囲の古墳が洪水で埋まってしまった後に造られた様です。周濠より出土した土器より、6世紀終わり頃に造られたと考えられます。

#### 8号墳

周濠のみがみつかりました。周濠の規模は、一辺7m、幅50~100cm、深さ20cmで、祀りに使われたと考えられる土器が出土しました。出土土器より、6世紀終わり頃に造られたものと思われます。

**横穴式石室** ほぼ磁北方向 (N10° W) に向いて造られており、中世の土坑、近現代の溝などによって削られ、墳丘はそのほとんどが、また石室の西半分も失われていました。残っていたのは、玄室の東壁と、玄室に取りつく、羨道の東壁の一部のみでした。残っていた部分の規模は、玄室の長さ 1.

8m、高さ 60cm、羨道は長さ 90cm、高さ 40cm を測ります。また玄室の壁際に、6 世紀中頃のものと考えられる須恵器の提瓶（壺型の容器）が 2 個、置かれています。酒などの飲み物を供えた跡でしょう。

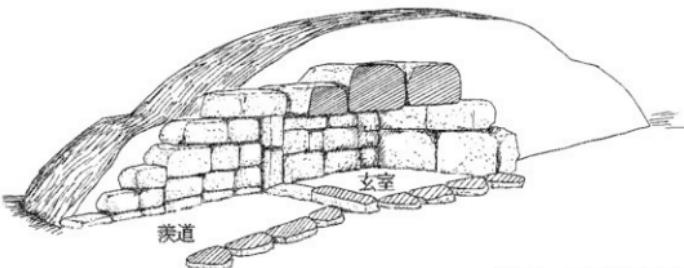


図11 横穴式石室模式図

**石棺群** 以上の古墳以外にも、河原石を組んで作られた石棺がみつかりました。出土遺物が非常に少ないので正確な時代は不明ですが、他の古墳同様、5～6 世紀のものであると思われます。以下に規模その他を記します。

	縦 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	主軸方向
石棺墓 1	104	35	30	N85° E
石棺墓 2	150	25～30	28	N61° W
石棺墓 3	60	13	24	N49° W
石棺墓 4	165	25	24	N80° W
石棺墓 5	120～	20～30	——	N57° W
石棺墓 6	60～	23	24	N66° E
石棺墓 7	80	25～30	24	N60° W

**埋設甕** 1 号墳の南側で出土した須恵器の甕で、口を北に向かって穴の中に寝かされた状態で据えられていました。復元すると、口の直径が 30cm、高さが 60cm ぐらいになります。また、埋めた時点ですでに割られていたと思われます。詳しい用途はわかりませんが、墓や、祀りなどに使用された可能性が考えられます。甕の埋められた時期は現在のところ不明ですが、1 号墳よりは新しいものと思われます。

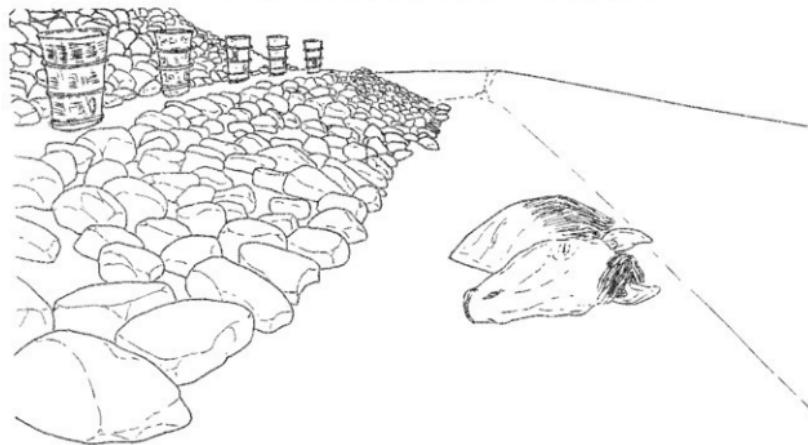
#### 4. まとめ

今回の調査地は、住吉宮町遺跡の古墳群の中心付近に位置しており、これまでの調査において周辺の地区でみつかっているような古墳や石棺がみつかりました。両者は空間的に区分けして造られていたようで、今回の調査区内では、東半は古墳の区域、西半が石棺の区域と決められているように見受けられます。

これらの古墳は全てが方墳であり、これも、以前の調査の傾向と共通するものです。また、石棺群には墳丘をもつものは無く、地面に直接掘られた穴の中に、およその方向をそろえて作られています。また傾向としては、石棺群を構成している石棺には小さいものが多く、中にはあきらかに子供を埋葬したものもあるようです。

また、今回みつかった古墳の築造された順序は、1号墳が最も古く、西に向かうにしたがって新しくなっていくようです。これまでの調査例をみても、住吉東古墳や坊ヶ塚古墳といった小豪族クラスの墓の周りには村落内の有力者クラスの墓、さらに外側に、墳丘を持たない石棺墓群、といったように、階級差にのっとった配置が考えられます。今回の調査では最初に1号墳のような、葺石や円筒埴輪、2段築成といった要素を持つ古墳が造られ、それを中心に連続的に古墳が築かれていった様子、さらに外側に石棺群を配置して区別していた様子がうかがえます。これは住吉宮町遺跡の古墳が重なり合うこと無く、整然と造られていることからもうかがえます。

1号墳の北辺の周濠からは、馬の歯が1頭分出土しました。当時の人々は、亡くなった人が生前かわいがっていた馬をいっしょに埋めて、あの世へのおともにしてあげようと考えたのでしょうか。



1号墳からみつかった馬の歯は、推定年齢が3～4歳と比較的若い、健康な馬のものであったようで、決して病氣やけがをしたような馬をえらんで埋めたわけでは無かったです。馬を殉殺し、古墳にささげる習慣は、熊本県を中心とした九州地方、大阪府の北河内周辺、長野県伊那谷周辺に多くみられますが、兵庫県内において古墳にともなう馬の遺体がみつかったのは初めてのことです。

横穴式石室をもつ古墳は、北西に位置する郡家遺跡などでみつかっており、住吉宮町遺跡でも今回で2例目の発見となりました。

今回の調査では、慶長の大地震の痕跡とみられる、地滑りや地割れなどが多く観察され、地震が遺跡におよぼす影響がよくわかりました。

また、住吉宮町遺跡の古墳群全体をながめてみると、今回の調査地を中心に、半径300mほどの範囲に、数多くの古墳が密集して造られていることが想像されます。これだけ大規模な古墳群を営むには一つだけのムラ（生活集団）では、まかないきれない規模のものであったでしょう。それは、一つのムラだけの墓地というよりも、郡家遺跡など、住吉宮町遺跡の周辺に展開した複数の集団が集まってできた、共同の古墳祭祀の場であったのかもしれません。今後の調査によって古墳がさらにみつかり、坊ヶ塚古墳や住吉東古墳といった、この古墳群のなかでは階層的に上位に位置すると考えられる古墳を中心としたいくつかの古墳集団の集まりがみえてくると、当時の社会制度や、地域どうしのつながりがもっとくわしくわかってくるでしょう。

今回の調査では

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長 工楽善通先生

立命館大学文学部教授 和田晴吾先生

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官

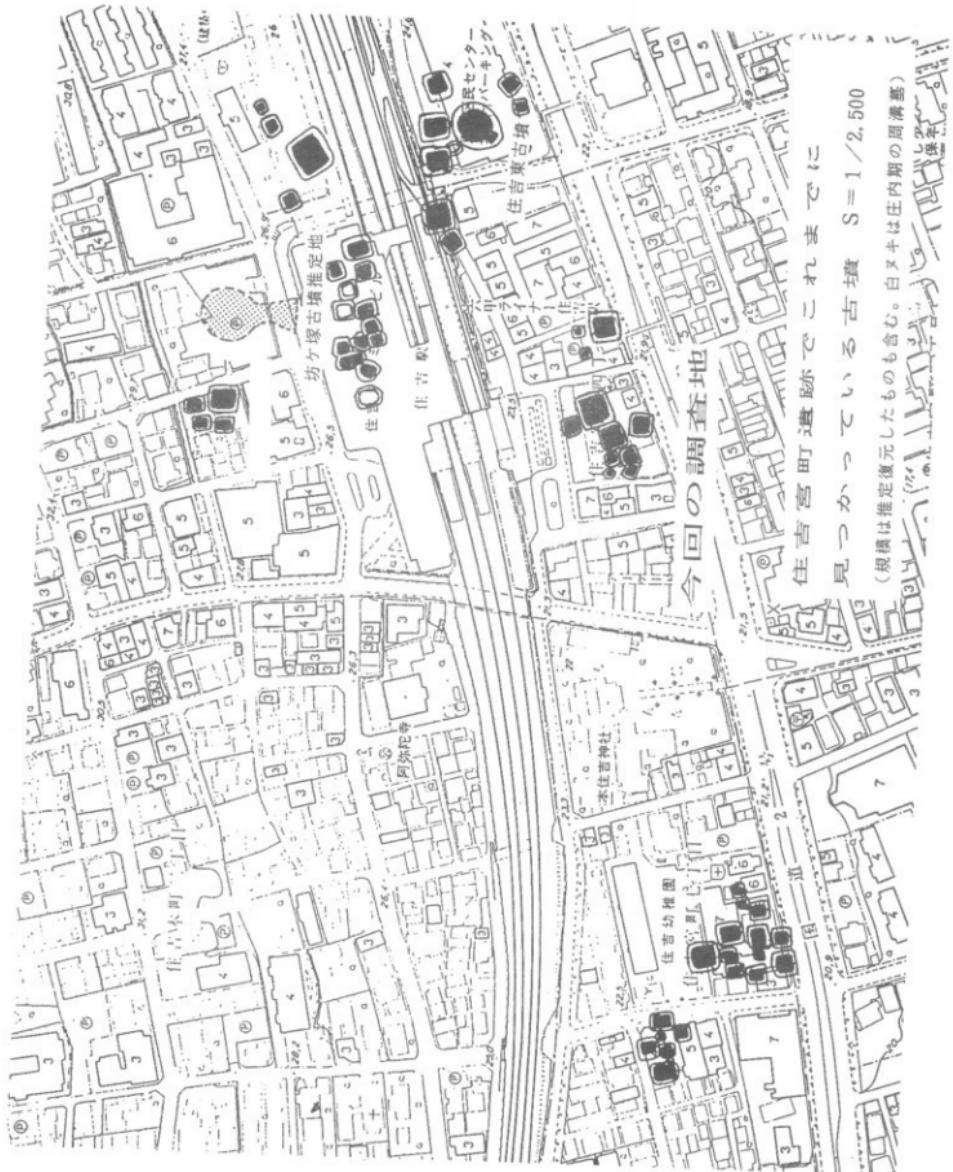
松井 章先生

にご指導いただきました。

また、JR住吉駅南地区市街地再開発組合

株式会社 熊谷組

のご協力を得ました。



# 用語解説

- 桂吉東古墳 ・・・ 昭和63年度の調査でみつかった古墳で、墳丘の形は帆立貝式古墳といい、円丘に方形の造出が付く。全長24m、円丘部径18m、高さ1.5mを測る。5世紀末～6世紀初頭の古墳である。
- 坊ヶ塚古墳 ・・・ 平成9年度の調査でみつかった古墳であるが、以前から絵図面や地籍図に前方後円形の地割りがみられ、前方後円墳としての存在が想像、されていた。この時の調査では、円丘部のみが発見された。推定径は約35mであり、周囲の地形や周辺の調査結果を総合すると、それまでの想定であった前方後円墳ではなく、住吉東古墳と同じく帆立貝式古墳である可能性が高いと思われる。
- 菟原郡 ・・・・・・律令制時代の行政単位の一つで、摂津国の中の、六甲山南麓に位置する。現在の神戸市灘・東灘区、芦屋市にあたる。
- 横穴式石室 ・・・ 古墳の埋葬施設の一種で、墳丘の側面から入る構造の石室を言う。棺を納める玄室と、玄室への通路である羨道からなる。日本では朝鮮半島の影響をうけ、5世紀に九州、近畿地方に導入され、6世紀には全国各地に波及した。
- 円筒埴輪 ・・・ 墓輪とは、古墳の墳丘に立て並べる素焼きの土製品の総称である。円筒埴輪とは円筒形の埴輪であり、数条のタガ状突起が胴部をめぐりその間に円形や長方形、三角形の透かし孔があけられる。埴輪のもっとも基本をなす形態であり、埴輪を持つ古墳で、円筒埴輪の無い例は無い。
- 紡錘車 ・・・・・・繊維に綫りをかけて糸にし、これを巻き取る道具を紡錘・紡輪といい、糸を巻き取る際に軸の回転に惰性を与えるはずみ車が紡錘車である。通常、石製もしくは土製であり、直径4～5cm程度の扁平な円形をしており、中央に軸を通す孔が開く。古墳時代には石製のものが多く、文様などが描かれるものもある。

円筒埴輪



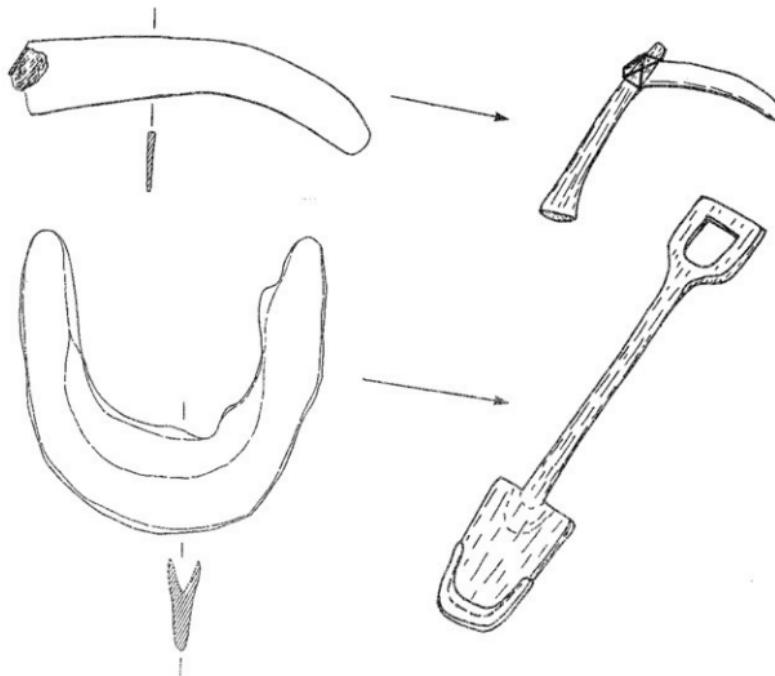
瓶頸形埴輪



にのみや

# 二宮遺跡

## 現地説明会資料



平成 11 年 3 月 7 日

神戸市教育委員会

今回の調査では、

奈良国立文化研究所 工渠善通氏

広島大学助教授 古瀬清秀氏

同 助手 安間石己氏

大阪府枚原市教育委員会 北野 重氏にご指導いただきました。

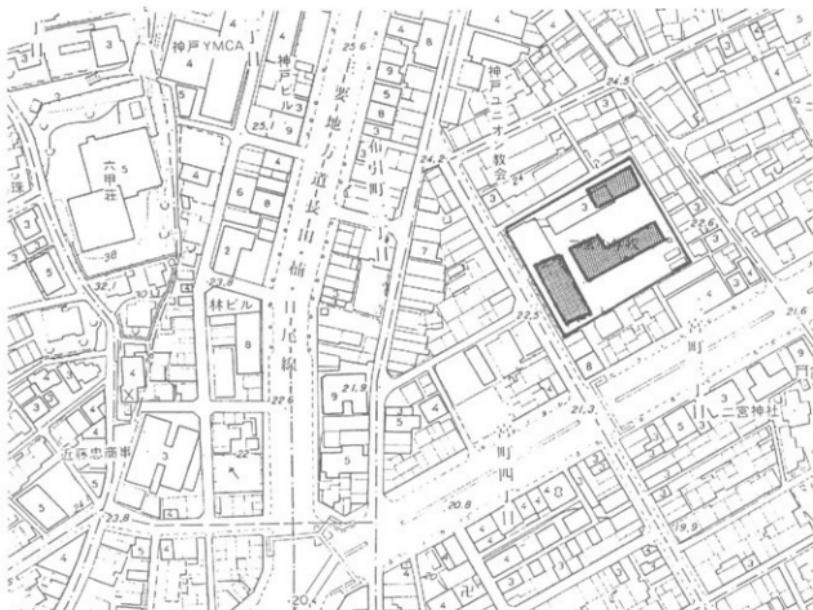
また、神戸市理財局のご協力を得ました。

1. はじめに 中央区二宮町(にみやちょう)周辺は、これまで、遺跡の分布が明確でなかった場所です。このたび、二宮小学校跡地に共同住宅が建設されることとなり、試掘調査を行ったところ、土器片や柱のあとが発見されたため、平成10年8月31日より調査を行っています。

六甲山系の南麓には、小さい河川によって運ばれた土砂が堆積してできた扇状地(せんじょうち)が広がっています。そのなかでも、洪水で土砂がたまって形成される高まりを自然堤防(しぜんていぼう)といい、古くから人々はその周辺に居住してきました。

二宮遺跡の東を流れる現在の生田川は、明治初年に兵庫開港に伴い、現在の位置に付け換えられた人工の川です。もともとは、新神戸駅から西に流れ、二宮遺跡の西側を通り、JR三ノ宮駅・阪急三宮駅の前を抜けて、神戸市役所前のフラワーロードを流れています。

二宮遺跡は、この旧生田川東岸の自然堤防上に営まれた村のひとつです。



今回の調査地の位置

## 2. 周辺の遺跡 この付近で確認されている遺跡は、次のようなものがあります。

JR三ノ宮駅南側に抜かる雲井遺跡では、縄文時代早期(やき)（約7000年前）～弥生時代中期（約2000年前）の村や墓のあとが発見されています。

また、新神戸駅の北側にある徳光路付近で、弥生時代中期の土器が出土しており、布引丸山遺跡とよばれています。この遺跡は、六甲山系南麓部の丘陵上に点在する高地性集落（こうせいしゆらく）の一つと考えられます。

新神戸駅の南側には、弥生時代後期～古墳時代初め（約1700年前）の住居あとが確認された熊内遺跡があります。

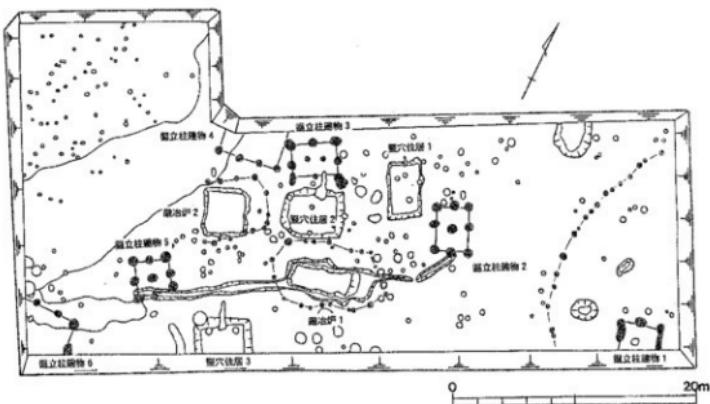
生田神社周辺には、古墳時代中期（約1600年前）の住居あとが見つかった生田遺跡があります。

また、今回の調査地付近に古墳が数基程度あったといわれていますが、現在はすがたをとどめていません。



二宮遺跡周辺の遺跡分布図

3. 今回の調査 今回の調査では、弥生時代～鎌倉時代の遺物、遺構が発見されました。について 作業のつごうで、調査区を、A～Cの3ヶ所に分け、調査を行いました。A、C区は、調査が完了後、埋めもどして、土置場となっているため、今回はご覧いただくことはできません。
- このたび、公開しましたB区では、飛鳥(あか)時代(約1400年前)の人々が生活していた村の跡が、発見されました。



B区 平面図

①B区 B区では、掘立柱住物址(はりてばしらわてもじ)6棟、竪穴住居址(たてあなすみわじ)3棟、鍛冶炉址が2カ所、溝や棚列址が発見されました。

また、飛鳥時代をやさかのぼる古墳時代後期の滑石製の糸車(よのわしゃ:糸車はねおもり)が当時の地面をおおう洪沢砂中から出土しました。

**竪穴住居址1** 2.8 × 4.6 mの長方形の竪穴住居址で、西側の辺にかまどがありますが、煙出しの部分は削られています。南と北の床面に周壁溝(しゅわいこう)という小さな溝が掘られています。これは、壁を伝って入ってくる雨水を処理する機能があります。

出土遺物から7世紀初めの住居址と判断されます。

**竪穴住居址2** 5 × 4 mの長方形の竪穴住居址で、北側の辺にかまどがありますが、砂混じりの土で築いているために、かまどの形がはっきりしません。

**堅穴住居址3** 5×2m以上の方形または長方形の堅穴住居址で、北側の辺にかまどがあります。屋根を支える柱が2カ所確認されています。東側の床面に周壁溝が掘られています。

堅穴住居址2、3共に時期を決める出土遺物が少ないので、7世紀初めごろの住居と考えられます。

**掘立柱建物址1** B区東端で発見された掘立柱建物址で、南北方向3間以上×東西方向2間の大きさで、柱を埋め込む穴が細長く掘ってあり、2本の柱を埋め込んで立てるようにしています。同様の建物址はA区で見つかっています。

土間のある建物が想定されます。

**掘立柱建物址2** 2間×2間の建物址で、柱の配置からみて、倉庫のような建物であった可能性があります。南北棟であったと思われます。

**掘立柱建物址3** 2間×2間の建物址で中柱(ぬしら)が2本確認され、掘立柱建物址2とほぼ等しい面積があります。縦柱(ちぢら)の建物であることから、倉庫のような建物が想定されます。

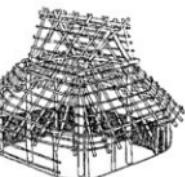
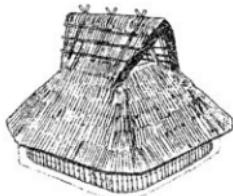
東西棟の可能性があります。

**掘立柱建物址4** 3間×2間以上の建物址で中柱がないため、床がなく、土間の建物が想定できます。

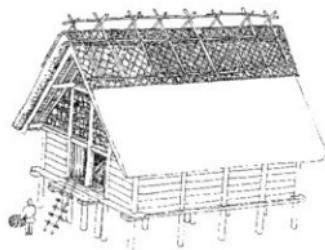
**掘立柱建物址5** 2間×2間の建物址で、柱の配置からみて掘立柱建物址2、3と同様の倉庫のような建物であった可能性があります。

**掘立柱建物址6** 2間×2間の建物址で、柱の配置からみて、土間の建物であった可能性があります。

掘立柱建物址の時期は、7世紀前半頃と考えられます。



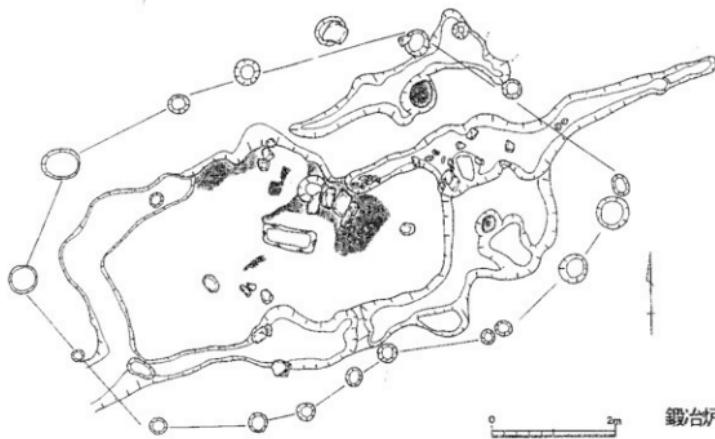
堅穴住居の復元例



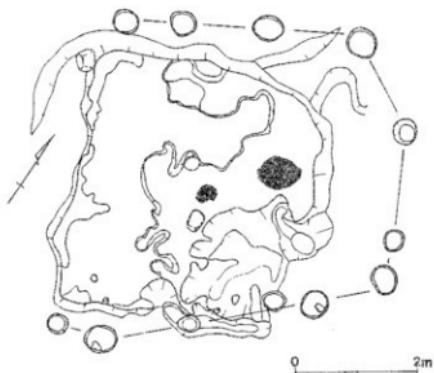
掘立柱建物の復元例

角野 清明著

『古代日本を発掘する 第6巻 古代の村』(岩波書店)より



鍛冶戸1 平面図



鍛冶戸2 平面図

#### 鍛冶戸址

B区の中央部には、焼けた粘土や炭が集中して発見される場所が点在しています。付近からは、鉄の道具を製作する時にできる鉄滓(てつい:鉄くろ)や砥石(としい)、鉄製品が発見されました。これらから、判断して鉄の製品を製造、修理する鍛冶工房があったことがうかがえます。

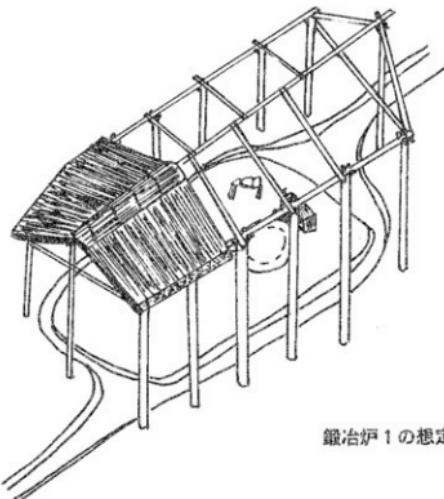
鍛冶炉自体は壊れているため、構造ははっきりと判らないのですが、砂地の地面の上に粘土をはってかの底盤とするか、あるいは地面をわずかに掘りくぼめて炉としているようです。また、作業の際に用いたと思われる石匁(いしゆ)の一部が残されているところもあります。

炉の周辺には、炭とさびた鉄粉が混じったような黒褐色土が広がっており、製品を鐵造(てんぞう:鉄を鍛冶でないで焼成すこと)したあとがありました。

### 鍛冶炉址1

鍛冶炉址1では、溝がほぼ周囲する内側に炉が設けられており、その周りからは柱を立てた穴が発見されました。このことから、雨水などの湿気の勢にあたらないように溝を周囲に掘り、柱を立てて屋根を葺いた建物があったと想定されます。

これに近い例は人頭狩跡(高市人頭(木村)遺跡)で発見されています。



鍛冶炉1の想定復元図

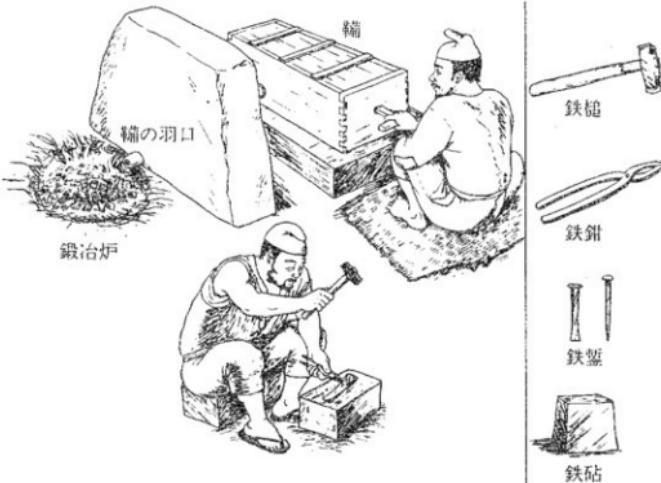
### 鍛冶炉址2

鍛冶炉址2では、 $3 \times 3\text{ m}$ ほどの範囲の砂の地面に粘質土を貼り、作業面を造っています。この面には、炉の痕跡と思われる赤く焼けた土や灰が入りこんでいました。また、その周りには、柱を立てた穴を取りまくことが判りました。これから、柱を立てて屋根を葺いたものと想定されます。

今回の調査で出土した鉄製品は、鋤先(まき)、鎌(ま)、刀子(とす:切)、釘(くぎ)、鎌(まか)などの農工具や武器である鎌(まか)が現在のところ確認されています。

さて、当時の鉄製品製作は、①当時の衙門的な機能に付属して、大規模な鍛冶を行う専業工房(鉄以外の金属加工を含む)と②地方豪族の下で周辺の村々の需要をまかなう程度の中規模の生産、補修を行う工房、③村単位で、鉄の道具の修理や簡単な製品の製作にあたる集落に分かれていたようです。

この遺跡で発見された鍛冶炉址や鉄製品からみて、②の人々が居住していたと考えられます。



鐵冶炉 1・2 平面図 鐵冶作業の様子 発掘調査箇所の全体図  
潮見 浩著『技術の考古学』(有斐閣)より

#### 柵 列

鐵冶炉址や住居址 建物址が集中する部分の東には、遺構のまばらな空白地はさんで、円弧をえがく一重の棚列が並び、その中に掘立柱建物址1が建てられています。西側の鐵冶炉址や住居などと柵で区切る意味は不明です。

#### 奈良時代

飛鳥時代の洪水によって、運ばれてきた砂を少し掘りこんで、土器が埋められていました。そこには、土師器(出き・像體(ゆうたい)・像(ゆう)・輪(わ))の皿が5枚と須恵器(すえき:蓋つかつて輪(わ)・輪(わ)・輪(わ))の环蓋(つばた:據(の)は)が2枚収められています。

なぜ、埋められたかは判りませんが、ひとつの考えとしては、ふたたび川が氾濫して、村を襲わないように川の神様にお祈りをしたまじないの跡という考え方方ができます。

B区の中央付近では、くぼ地に、生活で不要になった土器を大量に捨てているのが見つかりました。

B区、C区からは、土馬(どま・式年(しきねん)・御神社(ごじんじゃ)・御馬(ごま))がばらばらに割られた状態で出土し、それぞれの破片が接合しました。

平安～鎌倉時代 中央部で、東西方向7間、南北方向4間の掘立柱建物址が1棟、発見されました。5×2間の母屋(いのや)部分に各1間ずつ張り出した庭(ひし)を持ち、入母屋造(いのやけり)の可能性が高い建物です。

A区でも同時代の建物址が発見されていますが、建物の主軸方向が異なっており、同じ時期に建っていないかったのかもしれません。

②A, C区 A, C区は調査が完了し、埋め戻されていますので、ご覧いただけません。  
調査の成果の概要は、以下のとおりです。

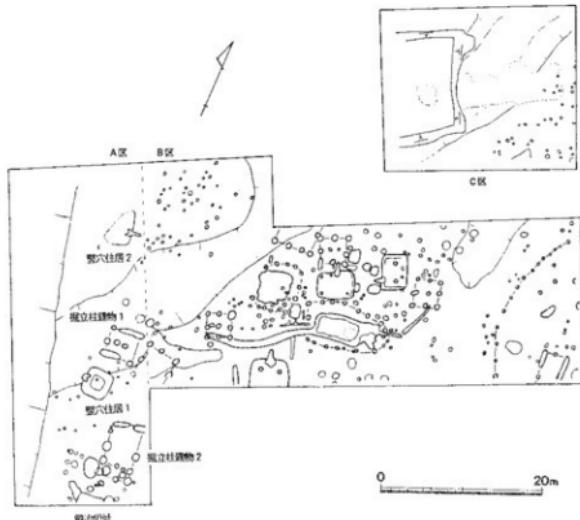
A 区 穹穴住居址(たてあじゆきし)2棟、掘立柱建物址(くつきらしゆぢ)2棟、鐵冶遺構(てつやいこう)が4～5カ所発見されました。

飛鳥時代 穹穴住居址 穹穴住居址は、一边3.5m(敷地面積1)、推定約5m(敷地面積2)の方形または長方形の大きさで、いずれもかまどを粘土で造りつけています。穹穴住居1は、周囲にベッド状の高まりがあります。屋根を支える柱の位置は不明です。いずれの住居址からも、7世紀初めの土器が発見されています。

掘立柱建物址 南北方向2間×東西方向2間(鐵冶遺構1)と南北方向4間×東西方向3間以上(鐵冶遺構2)の建物址が確認されました。

掘立柱建物址1は、柱を埋め込む穴が細長く掘ってあり、2本の柱を埋め込んで立てるようにしているのが特徴です。

掘立柱建物址2は、南側に庇(ひし)を持ち、中柱がない構造からみて、土間の建物であったと推定されます。この建物が無くなったあとに、鐵冶炉が造られたようです。



調査区全体図

**鐵冶炉址** 焼けた土や炭が詰まった浅い穴が南端部で4～5カ所発見されました。浅く地面を掘りくぼめた中に赤く焼けた土や炭などが発見されています。B区の鐵冶炉のように、屋根を葺いたり、溝を巡らせた痕跡が認められないことから、屋外の鐵冶炉の可能性があります。

炉址の周辺からは、鎌(ほ)の刃、刀子(とげ)、釘(くぎ)、鎌(ほ)、U字型鋤先(すゑさき)などの鉄製品が出土しました。

**奈良時代** 飛鳥時代の村を埋める洪水砂から、甕(かめ・壠を盛けるわ)が完全な形で発見されました。まじないのために埋められたと推定されます。

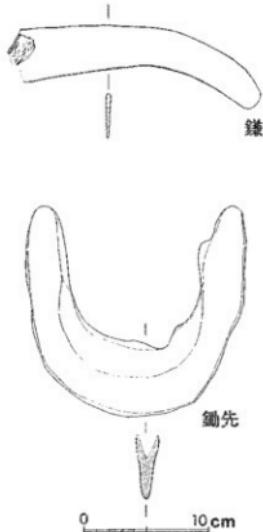
**平安～鎌倉時代** 南端部で、2×2間の掘立柱建物址  
**掘立柱建物址** が1棟確認されました。奈良～鎌倉時代の堆積層は、小学校校舎の基礎で破壊されており、残されている部分はわずかでした。

**C 区** 大雨が降った時にだけ、水が流れる  
**飛鳥** ような浅いV字状のくぼみが南北方向  
～奈良時代 にのびています。

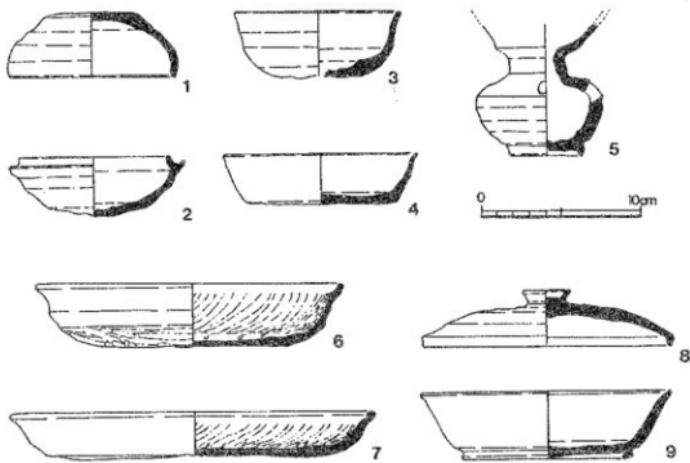
飛鳥時代には北から南西よりに流れているものが、洪水で土砂が大量にたまつた後は、流れの向きを南に変え、B区の中央付近にある奈良時代の土器を大量に捨てているくぼ地につながるようです。

また、奈良時代にはそのV字に直交して拳大～人頭大の石を積んで堤(つつみ)状のものを造っていますが、その目的はよく判りません。また、C区に掘られた穴からは、当時の役人が身につけた革帶(ベルト)の銅製帶金具(切妻)が出土しています。

**平安～鎌倉時代** 平安～鎌倉時代は耕作地となっていましたようです。前の時代からあったV字のくぼみは、幅を狭めながらも江戸～明治時代頃まで用水路として残っていたようです。



鉄製品実測図



出土土器実測図

4.まとめ 今回の調査でわかったことは、以下の通りです。

①弥生時代～古墳時代中期（約1800～1600年前）

A、C区の調査の結果、この周辺は、旧生田川の氾濫（ひらん）により、大きな石とともに弥生時代～古墳時代中期の土器が流されてきて堆積しており、当時は洪水の影響を受けやすい不安定な土地であったことがうかがえます。

②飛鳥（あか）時代（約1400年前）

土石流の堆積でできた自然堤防上に村ができます。今回の調査では、A～C区で堅穴住居址5棟、掘立柱建物址8棟、鍛冶炉址が発見されました。

鍛冶炉址には、鍛冶浜引川の小屋と排水施設を持っているものもあることから、堅穴住居や掘立柱建物などの住居内で行う小規模な鍛冶工房でなく、ある程度専業化された集団が鉄製品の生産を行っていたと推定されます。

たとえば、地方豪族の下で周辺の村々の需要をまかなう程度の生産、補修を行う工房という位置づけができます。

周辺で発見された住居や建物址は、生産に従事した工人とその家族の住居や倉庫などと考えられます。

しかし、この村の一部は生田川の氾濫による洪水に襲われ、埋没します。

### ③奈良時代（約1300年前）

洪水によって運ばれてきた砂に覆われた上には、住居は再建されず、まじないで供えられた土器や土馬が出土しました。

また、くぼ地に生活で不要になった土器を大量に捨てているのが見つかっており、石を積み上げて堤状のものを造っています。

なお、この時期の村の中心は、調査地の東側と推定されます。

### ④平安～鎌倉・室町時代（1200～500年前）

調査地付近は、基本的には耕作地として利用されているようですが、掘立柱建物址2棟が発見されていることから、時代によっては、部分的に屋敷地として利用されているようです。

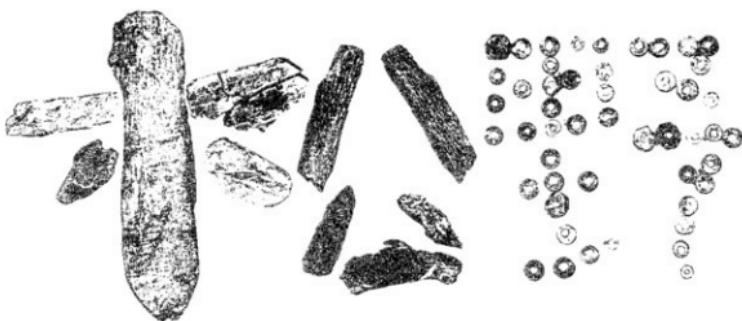
このように、二宮町のあたりでは、約1400年前の飛鳥時代から人々が生田川の洪水に悩まされながらも、この地に暮らし、耕してきたことが判りました。

『日本書紀』(にほんしき)という古い書物の神功皇后(じんぐうごう)の部分に、生田神社の祭神が「活田長嶽国」(いたながつくに)に鎮座したいというお告げをしたという記述があります。この時に祭られた場所が新神戸駅の北側にある布引丸山(砂山・はごね)であるという言い伝えが残されています。「活田長嶽国」の実態は不明ですが、この小山から見おろすことのできる、旧生田川両岸の自然堤防上に沿って営まれた村むらのことを示しているのかもしれません。

■ 宮道跡の堆积層上の状況と各年代表

堆積時代となる地 堆積の位置	地點からの高さ 0 m	主なできごと	おその代 現在
昭和前の地盤や土		第一小学校駅 駒木・横路大河原	
江戸時代～明治時代のあと	- 1.2m	第2次世界大戦・神戸市街地となる 駒木大水害 横河町駅大きな被害を受ける約60年前	約50年前
平安時代～室町時代のあと	- 1.4m	第二小学校駅 第一次世界大戦・神戸の港が発達する	約90年前
平安時代～鎌倉時代のあと	- 1.5m	日清・日露戦争	約100年前
鎌倉時代～鎌倉時代のあと	- 1.6m	兵庫開港 明治維新 御崎駅 江戸駅を置く	約130年前
鎌倉時代～鎌倉時代のあと	- 2.4m	御崎駅・梅木正成駅 豪雨、神戸の駅駅前に轟を造る	約700年前
和歌時代のあと	- 2.6m	豊元朝 忍宗大仏を建立	約800年前
和歌時代のあと	- 4.0m	大の坂 小野妹子、源義定として召へられる約1400年前	約1350年前
別荘時代～古墳時代のあと		聖武太子、御崎宮造営 健び大きなお勤塗がれる(神戸市立歴史館)	"
		源氏物語王 車野村根に轟を造る	約1600年前
			約1800年前

# 松野遺跡 地元説明会資料



1999. 3. 13

神戸市教育委員会

第1～3次調査

第4次調査

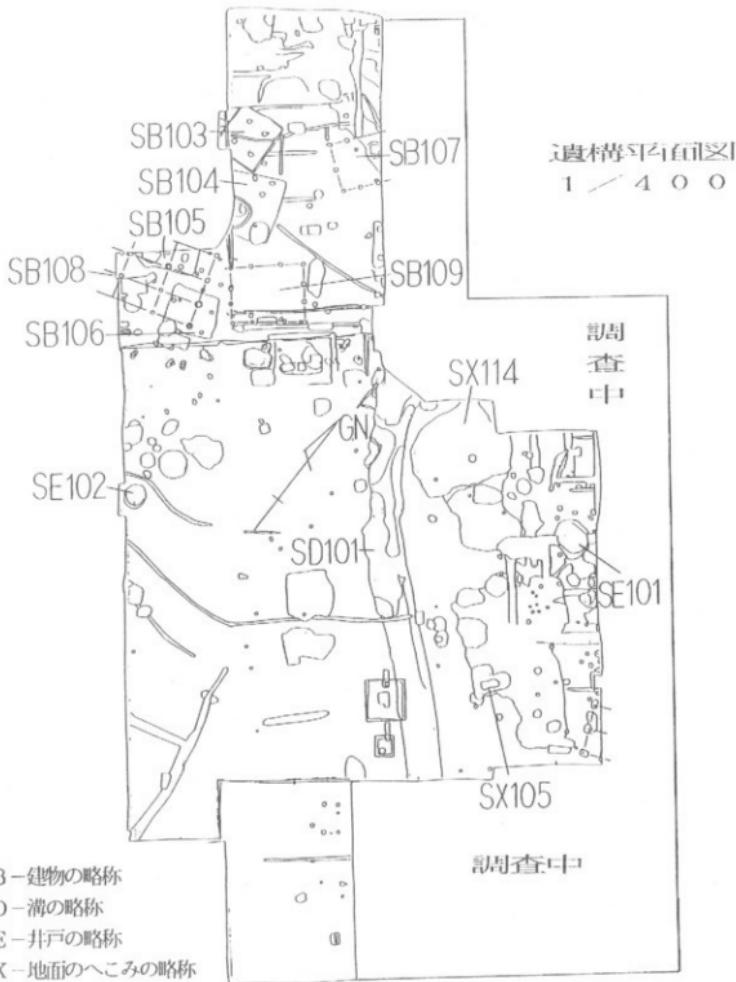
第5次調査

第7次調査

第6次調査

調査地区位置図

1 1,000  
1 1



松野遺跡は、昭和56年に当調査地点のJRの線路をはさんだ、北側の松野住宅の建設とともに、発見され地名から松野遺跡と名づけられました。

今回の調査は、震災復興の再開発事業による住宅建設に先立って、平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査をおこなっています。

## 今回の調査であきらかになったこと

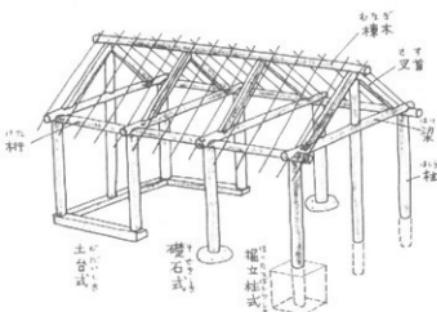
今回の調査であきらかになったことは、昭和56年におこなわれた発掘調査地（第1次調査）から今回の調査地のまで、遺跡がひろがっているということです。

第1次調査では、柵（さく）と濠（ほり）にかこまれた古墳時代の豪族の居館（きょかん）が発見されました。今回の調査では、これと同じような時代の掘立柱建物（ほたててばしらたてもの）や整穴住居址（たてあなじゅうきょし）などが見つかりました。また井戸や溝（みぞ）なども見つかり、当時の「むら」であることがわかりました。

今回の調査の南東部では、数多くの石製品が出土しました。石製品は当時の祭りやまじないをおこなったときに用いられたものと考えられます。当時の「むら」がどのような生活をしていたのかを考えための重要な資料となります。

また鎌倉時代ころの掘立柱建物や井戸も見つかり、鎌倉時代ころの「むら」であったこともわかりました。さらに遺構面（いこうめん）の砂層からは縄文時代晚期の縄文土器が少し出土しています。

柵（さく）と濠（ほり）に  
囲まれたこ建筑物群  
松野遺跡第1次調査  
(長田区松野通)



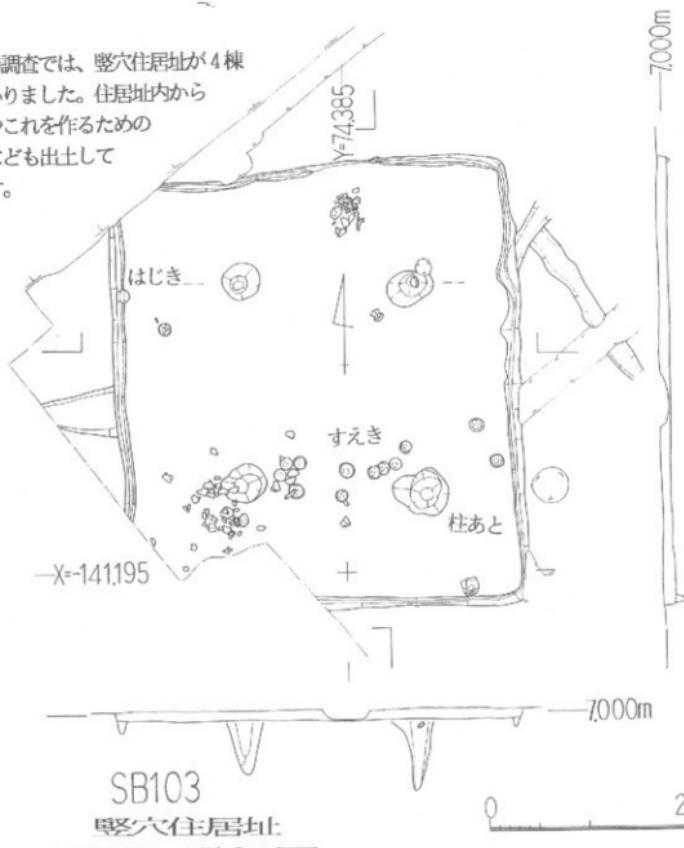
今回の調査では、掘立柱建物が4棟見つかりました。古墳時代の建物が3棟です。掘立柱建物の規模は、縦方向と横方向の柱と柱の間を数えてあらわします。となりの絵は2間（けん）かける3間の建物です。図が小さいですが2ページの建物の規模を数えてみてください。

竪穴住居址での生活のようす

『吉野ヶ里』より



今回の調査では、竪穴住居址が4棟  
見つかりました。住居址内から  
白玉やこれを作るための  
原石なども出土して  
います。



SB103  
竪穴住居址  
平面及び断面図

## 石製品の種類



双孔円盤  
そうこうえんばん



勾玉模造品



玉玉  
うすだま

現在で合計約1800個  
見つかっています。



剣型石製品

けんかたせきせいひん

## 古墳時代とは？

古墳時代は、今から約1700年から1400年ほど前の時代です。今回の調査で見つかった建物や溝は、約1500年ほど前の古墳時代後期初めころの時代にあたります。古墳時代は、古墳が数多くつくられた時代という意味です。

古墳時代には、中国大陸などからいろいろな技術がつたわってきました。新しい土木技術を使って古墳をつくり、今回の調査で見つかった須恵器（すえき）なども専門の知識をもった人々が、窯（かま）を筑いて焼いた製品です。

調査地南側の土の断面  
土の色の違いなどを  
観察してください。

1. 現代盛土層  
パワーショベルなどの  
機械力を使って掘る層  
瓦やレンガなどが入っ  
ています。

2. コンクリート  
現代の建物の基礎

5. 黄色砂層  
鎌倉から室町時代ころの  
洪水による砂層  
(約800年前)

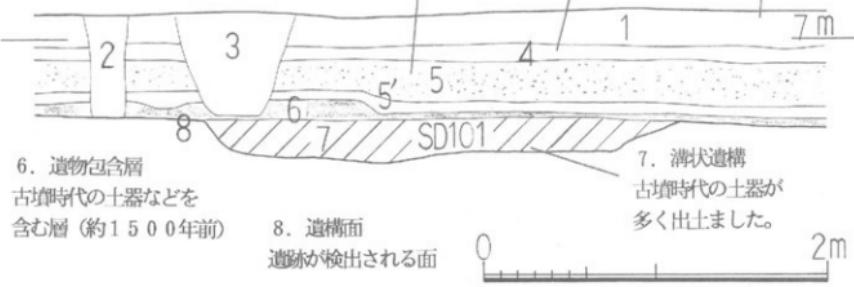
4. 旧耕土層  
明治時代ころまでの  
畑や田んぼの層

3. ごみあな

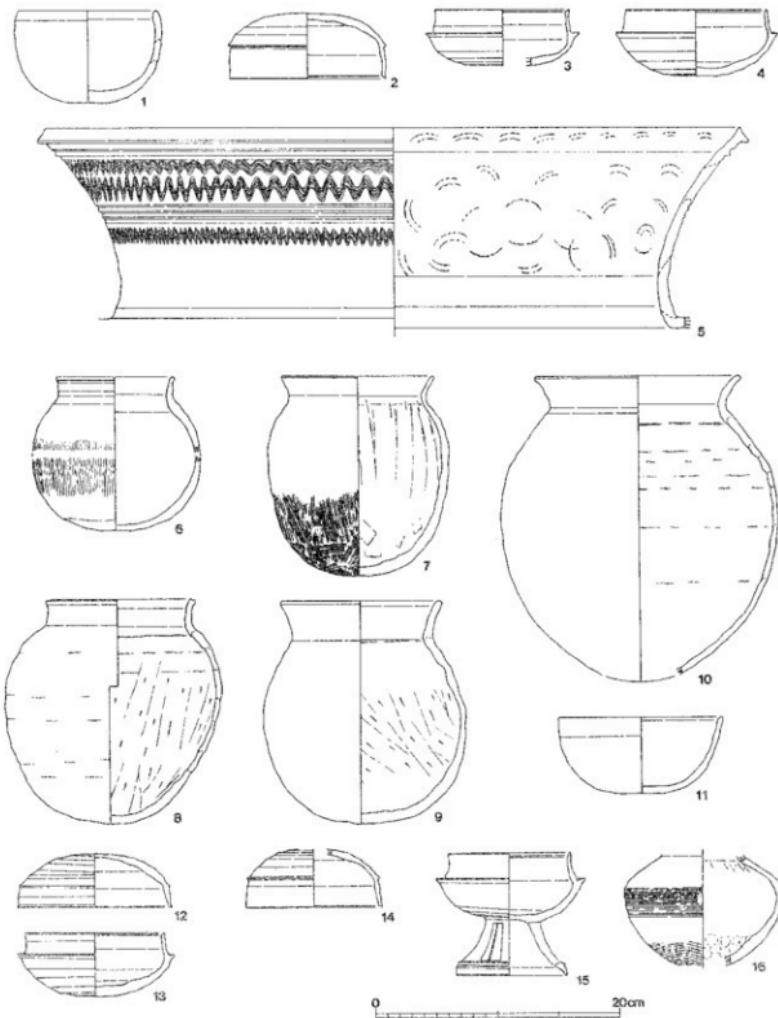
6. 遺物包含層  
古墳時代の土器などを  
含む層（約1500年前）

8. 遺構面  
遺跡が検出される面

7. 溝状遺構  
古墳時代の土器が  
多く出土ました。



南堀塗断面実測図



1・11土師器碗（はじきわん） 2・12・14須惠器环蓋（すえきつきぶた）

3・4・13須惠器环身（すえきつきみ） 5須惠器甕（すえきかめ）

6土師器壺（はじきつぼ） 7～10土師器甕（はじきかめ）

15須惠器高环（すえきたかつき） 16須惠器甕（すえきはぞう）

S E 1 0 2 (井戸) 出土土器



**展示会・見学会資料**

**平成9年度**



## 淡河町内遺跡展示会

展示解説

本日はお忙しい中、淡河町地域福祉センターに足を運んでいただきまして、あり難うございます。

ここに展示しましたのは、町内で出土した古い時代の遺物です。以前ここでセンター開設1周年を記念して、同様の展示を行いました。今回は、この時に展示できなかったものを中心に、皆様に見ていただきやすく準備しました。

遺跡の概略は、パネルを見ていただくとして以下、個々の遺物の簡単な説明をさせていただきます。

### 有茎尖頭器（ゆうけいせんとうき）

人々がまだ、狩猟や採集の生活を送っていた頃の、槍先または鏃（やじり）と考えられているものです。これは長さが4cmしかなく、恐らく鏃と思われます。有茎尖頭器はこの北区では、長尾町や山田町で出土していますが、決して数多く見つかっているものではありません。今から約1万年前と考えられる最古の淡河町民の残したものです。

### 縄紋土器（じょうもんどき）

縄紋土器は、形や紋様の変化をとらえて早期・前期・中期・後期・晩期の5時期に分けられています。有茎尖頭器はこの内、早期に属すものです。縄紋時代の最後はすなわち「弥生時代の開始」となりますが、弥生時代の始まりは今から約2500年前と考えられます。

ここにありますのは、縄紋時代でも「後期」のものです。後期の縄紋土器はご覧のように口の縁に近いところに紋様を集中させるのが1つの特徴です。

### 韓式系土器（かんしきいどき）

中村遺跡で古墳時代の住居を調査していた時、変わった形の土器が見つかりました。それは小さな鉢形のもので、当時の土器が丸底であるのに対し、平底をしていました。

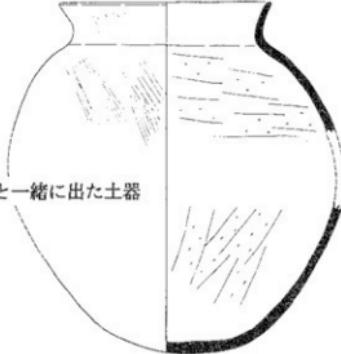
これは、韓式系土器と呼ばれるもので、朝鮮半島南部の遺跡でよく発掘されるものです。神戸市でも海沿いの遺跡で出ることはありましたが、内陸部からの出土は初めてのことです。

この土器は小さいながらも、当時の朝鮮半島との何らかの交流という大きな話題を提供してくれる貴重な遺物です。



中村遺跡出土韓式系土器 S = 1 : 4

韓式系土器と一緒に出土した土器



### 須恵器（すえき）

平成9年12月に現地で説明会を行いました勝雄遺跡で出土したものです。

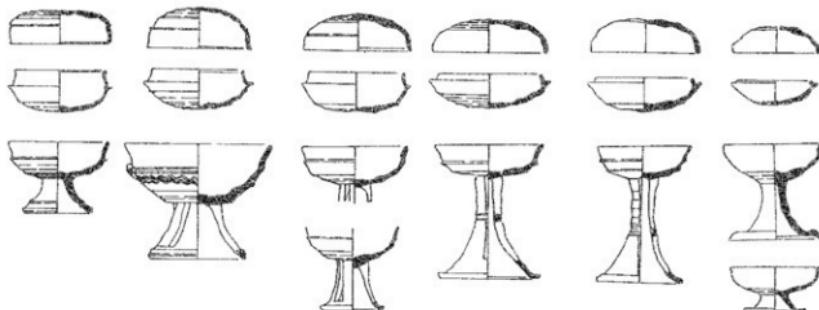
須恵器とは、登り窯で焼いた灰色をした堅い陶器のことを言います。古墳時代でも前期、今から約1600年前までは、素焼きの土器を使っていましたが、その後、古墳時代中期になって朝鮮半島から窯で焼く技術を持った人々が来て作り始めたのが須恵器です。

ここにある須恵器は飛鳥時代、西暦で言うと600年～650年頃のものです。

ところで、この須恵器がなぜ西暦600年～650年頃のものと言えるのか不思議に思われたことはないでしょうか。

私たちは、土器を扱う場合「同じ形のものは、同じ時代に作られたもの」という事を前提とします。ですから、勝雄遺跡の須恵器の時代を考える時には、これと同じ形のものがどこで出土しているか調べることから始めます。

奈良県に牧野（ばくや）古墳という円墳がありますが、この古墳は7世紀初め頃に亡くなったと古い記録から推定される「押坂彦人大兄皇子（おしさかひこひとのおおえのとうじ）」の墓である可能性が高いものと考えられています。この古墳から出土した須恵器と勝雄遺跡で出た飛鳥時代の須恵器でもやや古いタイプはよく似ています。



5世紀の須恵器

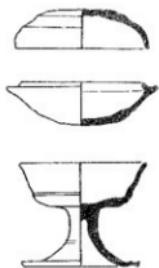
6世紀の須恵器

7世紀の須恵器

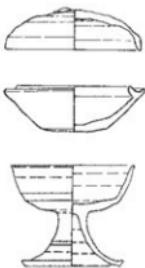
須恵器の形の変化

京都の宇治市に隼上り窯（はやあがりよう）という登り窯があります。ここでは須恵器と共に瓦も焼いていましたが、この瓦は飛鳥の蘇我氏本宗家の氏寺「豊浦寺（とゆらでら）」に運ばれていました。隼上り窯は蘇我氏御用達の窯とみて良いでしょう。蘇我氏本宗家は有名な大化の改新で滅亡するのですから、隼上り窯も操業を中止するのは西暦645年頃ということになります。ここで終わり頃に焼かれた須恵器は、勝雄遺跡から出土する飛鳥時代の須恵器でもやや新しいタイプの須恵器とよく似ているのです。

勝雄遺跡出土の須恵器が西暦600年～650年頃と考えるのは以上の理由からです。私達が、この土器は何年ぐらい前だとか言っているのも、あてずっぽうばかりではないことがお分かりいただけましたでしょうか。



隼上り窯出土須恵器 S = 1 : 4



勝雄遺跡出土須恵器 S = 1 : 4

#### 刀子・火打金（とうす・ひうちかね）

木津遺跡で見つかったお墓には、長さ約31cmの短い刀（刀子）と、火をおこす道具の火打金、そして中国で作られた青磁の碗が供えられていました。

ここに葬られた人はどのような人だったのでしょう。刀や中国から輸入された青磁碗を持っていましたことから、ある程度身分のある人と想像するのも一案です。

しかし、短い刀を持つ人は、平安時代～室町時代に描かれた絵巻物のなかに沢山見られます。絵巻物のなかの人物の身分を特定するのは大変困難なことです。寺の坊主、袖人（そまうど、材木の伐採の仕事をするひと）大工、馬子や農民など一般庶民に至るまで腰に刀を差していたことが窺えます（パネルを見てください。）

中世の人々にとって、刀を腰に差すことは実用の目的もあったでしょうが、頭に鳥帽子（えばし）を被るのと同じぐらい、現代の女子高生が足にルーズソックスを履き、片手に携帯電話を握ると同じぐらい、ある種の「作法」・「流行」であったのかもしれないのです。

## 青磁碗（せいじわん）

平安時代の終わり頃から日本は、中国と盛んに貿易をおこない様々なものを輸入します。一般的には12世紀～13世紀以降、このような青磁・白磁が多量に輸入され、庶民が使う日常の食器にも中国製磁器の占める割合が高くなると言われています。

しかし、実態はまだ不明瞭な点が多く、日本中、すべて均等に中国製磁器が普及していくのかは疑問のあるところです。

この問題を解決するには、遺跡から出土する磁器の破片を一つずつ数えて、他の日常容器との割合を調べるしか手はありません。このような気の遠くなるような作業を通じて、磁器類がどのように普及していったか、ひいては木津の墓に葬られた人がどのようなひとであったのかが言えるようになります。



木津遺跡出土 龍泉窯系青磁碗

## 青磁・白磁破片（せいじ・はくじはへん）

淡河町で発掘して出た遺物は、全て埋蔵文化財センターに持って帰っています。磁器の破片についても同じで、これは今言ったことを調べるのを1つの目的としているからです。

これらの破片は当然のことながら、元々は完全な形であったものです。私達は、破片を見て頭の中で完全な姿の碗を思い浮かべます。同じように想像した上で、皆様はこれらの破片が多いと思われるでしょうか、案外少ないものだと感じられるでしょうか。

これらの「つまらない？！」破片を見て、当時の人々の生活ぶりを想像していただけるなら、今回の展示の目的は達したものと思います。

- ・「淡河町遺跡展示会」
- ・場所 淡河町地域福祉センター
- ・主催 神戸市教育委員会文化財課
- ・期間 平成10年1月31日～2月8日
- ・この展示にあたっては、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所のご協力を得ました。

展示会・見学会資料

平成10年度



えびすちょう  
須磨区の遺跡—戎町遺跡と大田町遺跡—

展示解説

まんよう

須磨は万葉の昔から歌にも詠まれる古い歴史を持った町です。平安時代の在原行平とこの地の姉妹との伝説や、それにちなんだ地名も残っています。

ありわらのゆきひら

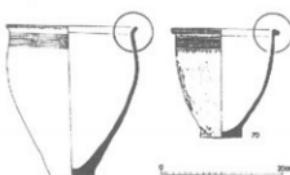
しかし、須磨の歴史はそればかりではありません。境川のあたりでは今から約1万年前にさかのぼる土器や石器などが見つかっています。

今回、ここに展示しましたのは、須磨区の代表的な遺跡とも言える戎町遺跡と大田町遺跡から出土した物です。以下、展示した物の一部を紹介します。

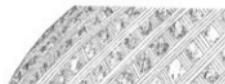


じょうもんじだい ばんき  
☆最初の縄文時代晩期の土器のうち、「深鉢」は小さな破片ですが左の図のような土器で、口の部分の破片です。

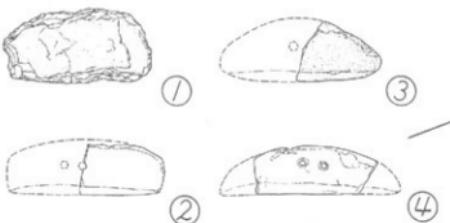
ふかばち



やよいじだい ぜんき  
かる  
☆弥生時代前期の壺が2つあります。口の形が少し違っているのがわかりますか？左のものはこの「摂津」地域で一般に見られるのですが、右は「播磨」—境川から西の地域ーの影響をうけてつくられた土器です。



☆弥生時代中期の壺は、色々な文様で飾られていますが、左の絵の様な文様がありますね。これも「播磨」地域でよく見られるものです。



いしほうちょう

☆稻の穂を摘み取る道具「石庖丁」は、色々な種類の石で作られました。①と②は北区道場町塩田から、③は明石川の辺りから、④は和歌山県または徳島県からはるばる運ばれてきたものです。大型の石庖丁は奈良県または香川県のものでしょう。石ばかりか、土器も大阪府東大阪市の付近から運ばれています。

2000年も前からこの地域の人々は、様々な地方の人達と交流を持っていたことがわかります。



① 和同開珎  
(708年)



② 萬年通寶  
(700年)



③ 神功開寶  
(705年)



④ 隆平永宝  
(708年)



⑤ 富寿神宝  
(818年)



⑥ 承和昌宝  
(855年)



⑦ 長年大宝  
(848年)



⑧ 延喜通寶  
(850年)



⑨ 貞觀永寶  
(870年)

☆奈良時代・平安時代の政府は計12種類の銅貨を作りました。1枚の「和同開珎」で約12合（12食ぶん）の米と交換ができました。ただ初めからニセ金が横行したり平安時代には粗悪な錢が作られたりして、次第に銅錢は流通しなくなりました。



⑩ 延喜通寶  
(890年)



⑪ 乾元大宝  
(907年)

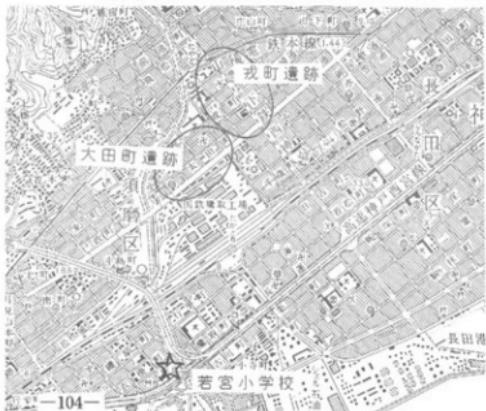


⑫ 乾元大宝  
(958年)

まげもの　　えさき  
☆曲物は古い絵巻にも登場する容器で、米や水、お酒や野菜など様々なものを入れていました。



以上、少しですが展示したものについて説明しました。これらのものを通じて、当時の人々のくらしづくりを皆さんも想像してみてください。



- ・「須磨区の遺跡－戎町遺跡と大田町遺跡－」
- ・場所　須磨区若宮小学校
- ・会期　平成10年5月29日～平成10年6月19日
- ・主催　神戸市教育委員会文化財課

# 新方ムラのまつり

のでせいぼうちんしゃつといほつちゅうしん  
・野手・西方地点の出土遺物を中心にー



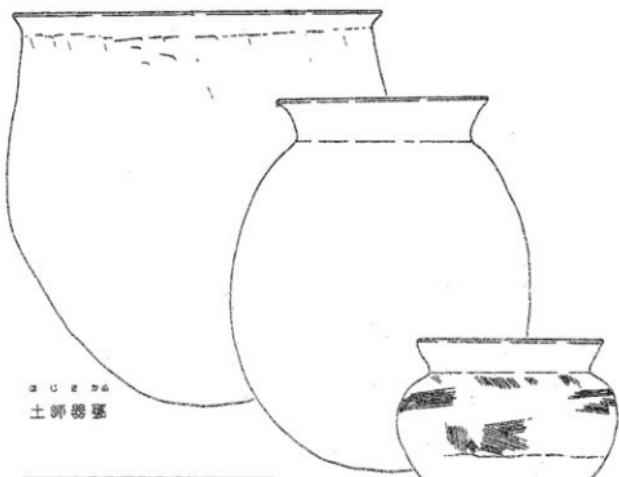
ます。

出土した遺物は大変多く、今回はその中で古墳時代中期（今から約1550年前）のものを展示しています。これらは一辺4mほどの方形の穴から出土しました。土器は素焼きの土師器が中心で壺が10個、壺が4個、鉢が6個、高杯が34個、甌が3個、飯蛸壺が約50個とミニチュア土器が2個、そして製塩土器の破片がありました。穴窯で焼いた灰色の須恵器は少なく樽形窓1個と坏が数個、そして器台が1個あります。

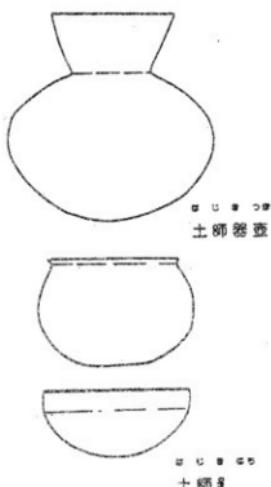
これらの土器とともに出土した玉には、有孔円盤（銅の鏡を模したもの）34個、剣形5個、勾玉7個そして白玉と呼んでいる直径5mm程の玉が約5300個程あります。これらは本來銅や鉄、碧玉、メノウ、ガラスなどで作られるものを、柔らかくて加工しやすい、そして大量に手に入れるができる滑石や結晶片岩などで、鏡・玉・剣を模倣して作ったものです。これらは何らかの「まつり」に使われたと考えられています。新方ムラのまつりの対象がなんであったかは明らかではありませんが、飯蛸壺や製塩土器などの存在から、海の幸を願う「まつり」だったのではないかでしょうか？

てんじ  
今回ここに展示していますものは、平成8年から9年にかけて発掘調査を行いました新方遺跡から出土した遺物です。この遺跡は明石川と伊川に挟まれた沖積地に立地する、今から約2300年前の弥生時代前期から江戸時代に統くムラの跡です。

ばっか  
発掘調査の結果、弥生時代前期の石のやじりが刺さったまま葬られた人の骨や、弥生時代中期の方形周溝墓（周囲に溝を巡らす墓）、古墳時代の竪穴住居や奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物などが見つかってい



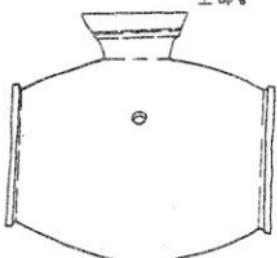
土師器壺



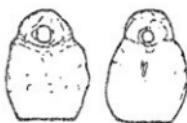
土師器壺  
土師器



土師器高环



須恵器椭形壺



飯塚型



ミニチョア土器



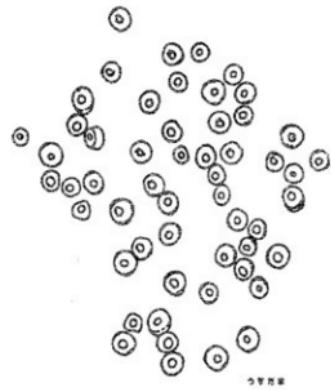
有孔円盤



勾玉



剝形品



白玉

・「新方ムラのまつりー野手・西方地点の出土遺物を中心にー」展

・場所 玉津南公民館

・会期 平成10年6月24日～7月3日

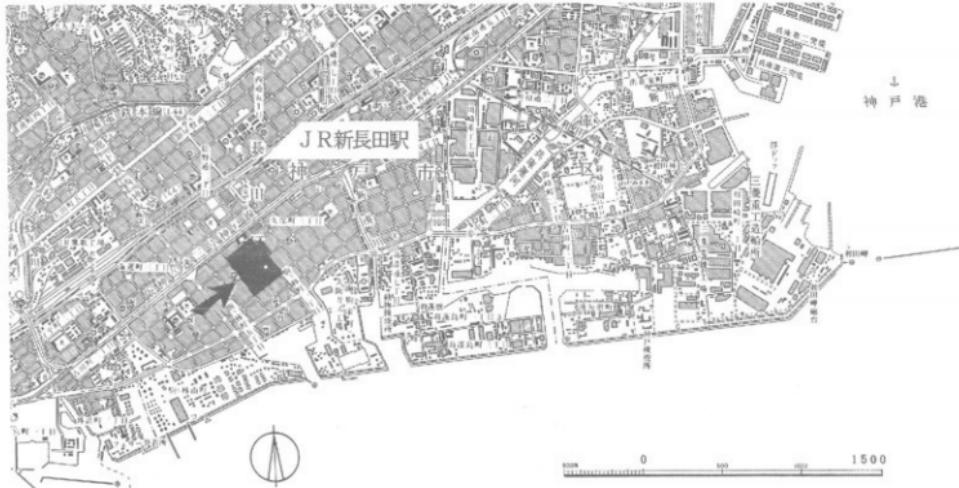
・主催 神戸市教育委員会文化財課

土器は1/4に縮小、玉類は実物大です。

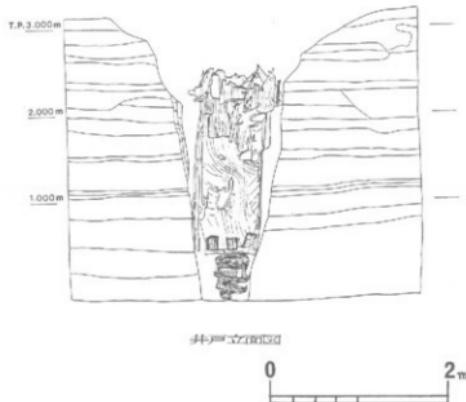
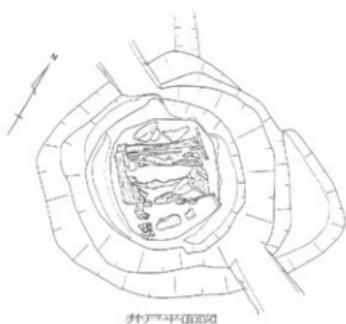
## ふたばちょういせき

### 二葉町遺跡亦出土の舟船材について

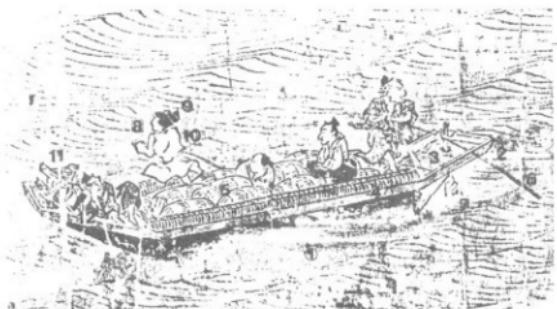
二葉町遺跡は、現在の海岸線から約500m内陸に入った海拔3～4mの平野部に立地した平安時代～室町時代の集落遺跡です。



今回の発掘調査では、今までのところ掘立柱建物5棟以上と井戸を8基見ました。船材を再利用した井戸は、直径3mの円形の堀方の中に一辺1mの方形の井戸枠を設けていました。その下に井戸の中が崩れないように井戸側として船材がたてられていました。さらに下には、水を溜めるために、曲物が据えられていました。

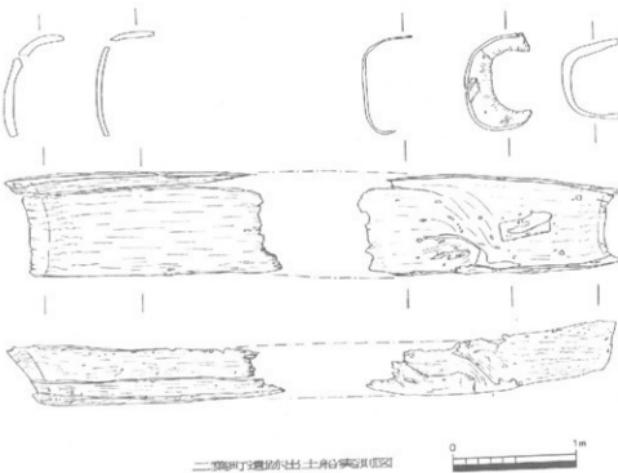


すえき はじき がき せいじ はくじ  
 船材と一緒に出土した土器片（須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁等）から井戸が使われなくなった時  
 期は、鎌倉時代（13世紀初め）であることが判りました。同じ時代の船の構造を知る手掛かりとしては、  
 いっぺんしうに見えても えまきもの  
 「一遍上人絵伝」などの絵巻物がありましたが、水中の船体構造は描かれないとよく解りませんでした。



- 1 - 小型商船
- 2 - 波除け
- 3 - 緒(じ)
- 4 - 流除け簾(なみよけしとみ)
- 5 - 米俵
- 6 - 横(よ)
- 7 - 舶(か)
- 8 - 横を潜ぐ
- 9 - 舟鳥櫓子(さむらいえはし)
- 10 - 小袖(こそて)
- 11 - 木底(きぢ)
- 12 - 脚枕(ひじまくら)

いとがわ くずのき たんぶ  
 井戸側を取り上げ、詳細に観察した結果、この船材は、楠木の大木の根に近い部分を割り抜き、端部  
 おあつ う くちじょう てつくぎ せんしょ せんたいどうぶ つ た ふくがいくりぶね  
 を分厚く受け口状に加工し、鉄釘が打ち込まれていることから船首と船体胴部を継ぎ足す「複材刳船」  
 さんごいこうぞう せんたいどうぶ そくめん そくじょうぶ よこががだ えん せん  
 (三材構造)の船でした。また、船体胴部の側面は50cmと立ち上がりが深く、側上部には横長椭円の穿  
 こう くぎあな げんそくばん  
 孔と釘穴があることから、さらに上部に舷側板が取り付けられた可能性が考えられます。



二 両側丁縫合部土舟分厚断面図

絶  
対  
を  
体験しよう!!

若松町遺跡第2次調査

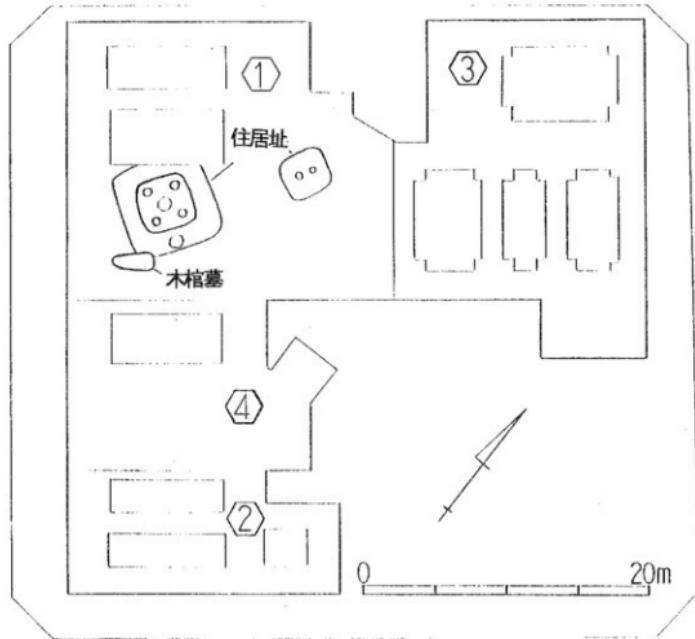
1998. 7. 28

神戸市教育委員会



- |    |          |
|----|----------|
| 1  | 若松町遺跡    |
| 2  | 鷹取町遺跡    |
| 3  | 大田町遺跡    |
| 4  | 戎町遺跡     |
| 5  | 千歳町遺跡    |
| 6  | 松野町遺跡    |
| 7  | 二葉町遺跡    |
| 8  | 長田野町遺跡   |
| 9  | 長田本庄町遺跡  |
| 10 | 得能山古墳    |
| 11 | 神楽町遺跡    |
| 12 | 念佛山古墳    |
| 13 | 御船遺跡     |
| 14 | 長田南遺跡    |
| 15 | 三番町遺跡    |
| 16 | 五番町遺跡    |
| 17 | 長田神社境内遺跡 |
| 18 | 林山遺跡     |
| 19 | 名倉遺跡     |
| 20 | 室内遺跡     |
| 21 | 上沢遺跡     |
| 22 | 会下山遺跡    |
| 23 | 会下山二本松古墳 |
| 24 | 熊野遺跡     |
| 25 | 河原町遺跡    |
| 26 | 夢野丸山古墳   |
| 27 | 祇園遺跡     |
| 28 | 雪御所石室跡   |
| 29 | 楠・荒田町遺跡  |
| 30 | 東山遺跡     |
| 31 | 大開遺跡     |
| 32 | 兵庫津遺跡    |





調査地区割り図

#### 今回の調査でわかったこと（第1地区）

ふたつの時代の生活面がありました。弥生時代後期（約1800年前）と古墳時代前期（約1700年前）の生活面です。

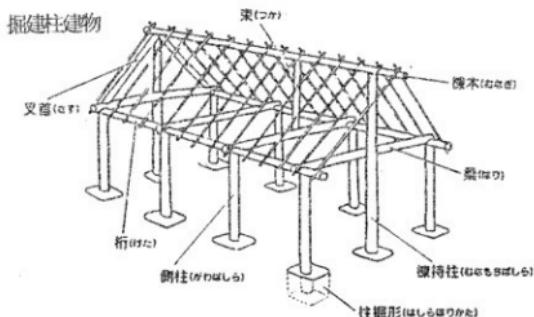
最初の生活面（第1遺構面）にはふたつの時代の遺構と遺物が出てきました。鎌倉時代（約800年前）の溝や墓と古墳時代の家のあと（住居址）です。鎌倉時代の墓からは、お供えに使った壺や皿や小さな刀（刀子・とうす）が出土しました。また葬られた人の歯が2つ出土しました。

古墳時代の住居址は、一边が約4mの長方形の家です。住居址の床面からは壺や甕が出土しました。またわずかですが炭化した木材も検出されました。この住居址が火災にあった可能性があります。他に柱の穴が2か所検出され、2本の柱で屋根をさえていた構造であったことがわかります。

もうひとつの生活面（第2遺構面）では、弥生時代後期の住居址と溝が出てきました。この住居址は一边が約7.5mのかどがとれたような正方形の家です。この住居址からも土器（壺・甕・高杯）や鉄製品が出土しました。また先の住居址と同じく炭化した木材が検出されました。

## 第2・4地区を現在調査中です

鎌倉時代の生活面を現在調査中です。建物（掘建柱建物・ほったてばしらたてもの）の柱穴がたくさん見つかっています。またこの時代の土器もたくさん出土しています。これらに混じて弥生時代の石のやじり（石蹴・せきぞく）も見つかりました。



遺跡はどうして見つかるのでしょうか？

『豊饒の大地』より

分布調査や試掘調査をおこなうことによって見つけていきます。

分布調査 田や畑や山林を歩いて、土器などが落ちていないかを確かめて行く方法

試掘調査 地面に試し掘りの穴をあけ、土器などが含まれて層（遺物包含層）があるかどうかを確かめて行く方法

このふたつの方法を併用しながら、その記録を地図に記録していきます。こうしてできたものを遺跡分布地図といいます。

なぜ、発掘調査をするのですか？

工事などによって地下に埋もれている貴重な資料が明らかにされないまま、破壊されることがないようにするために発掘調査をおこないます。

発掘調査で得られた成果は、その土地の歴史を明らかにする資料となります。

またこのように発掘調査で得られた成果は、現地説明会をおこなったり、展覧会を開催して市民の皆さんに見ていただけるようにしています。そしてまた埋蔵文化財に関心をもっていただき、その重要性を理解していただけるように努力しています。

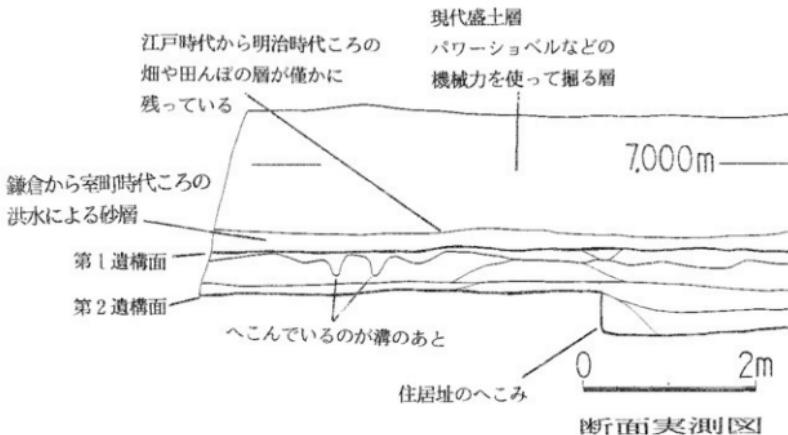


### 発掘調査の手順（断面実測図参照）

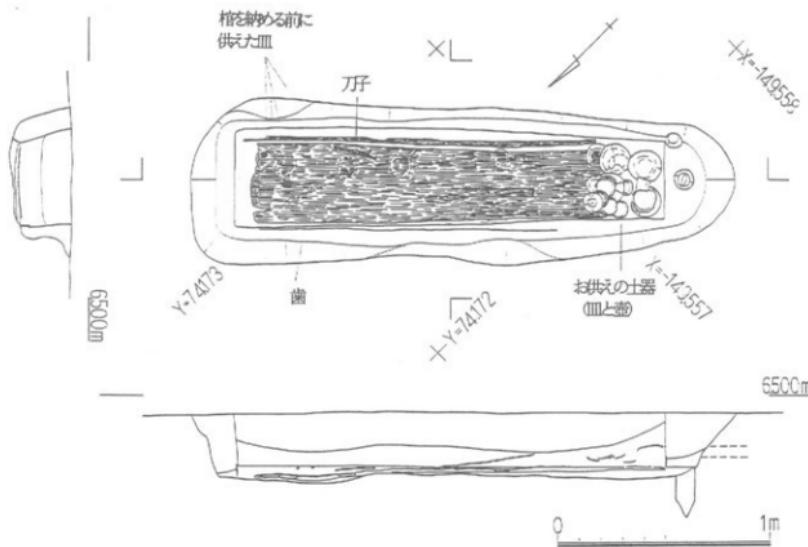
- 1 パワーショベル等の機械力を用いて遺跡の存在する層まで掘る
- 2 スコップやつるはしななどの大きな道具で残ったレンガやタイルの入っている土を取り除く
- 3 土器などが含まれて層（遺物包含層）を手バチ・手ガリ・手スコで掘る
- 4 出てきた土器は遺跡名・出土層・日付などを書き込んだラベルとともに遺物袋に入れる
- 5 手ガリ・手スコで層の表面を丁寧にけずり遺構（柱穴・溝など生活の痕跡となるものを総称して遺構という）を検出する
- 6 遺構を掘る 遺構によってはその埋まりかたなどを明らかにするため断面図を書いたり、写真をとる
- 7 遺構を測量機械を用いて図面を書く
- 8 遺跡の部分や全体の様子を写真にとる
- 9 遺跡を埋めもどす（現地調査の完了）

---

- 10 写真や図面の整理
- 11 出土遺物を洗う
- 12 出土遺物を復元する
- 13 出土遺物を実測する
- 14 出土遺物の写真をとる
- 15 発掘調査の報告書を書く
- 16 整理がすんだ写真・図面・遺物などを収納・保管する

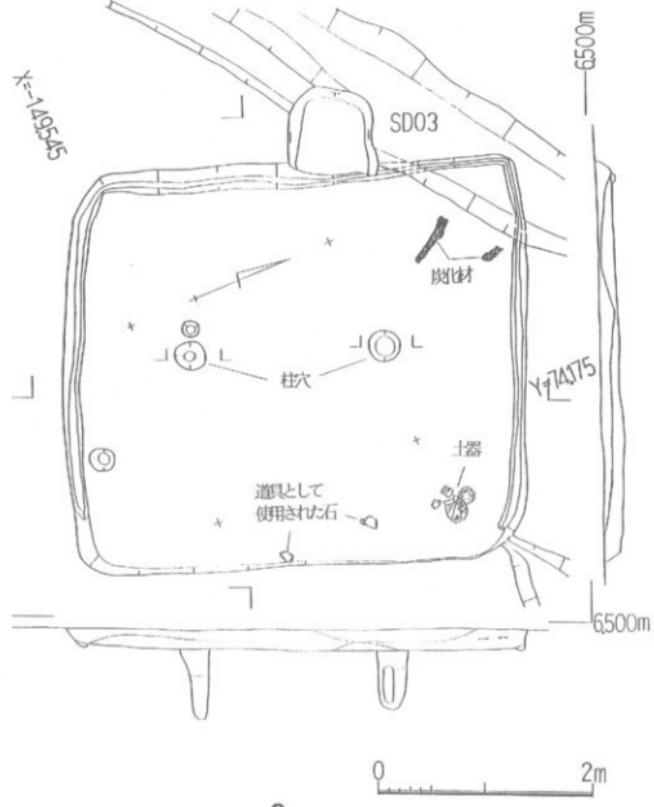


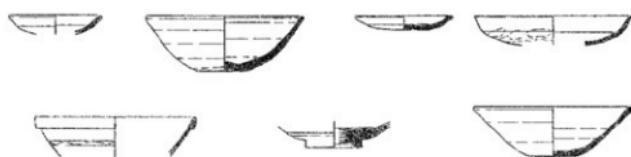
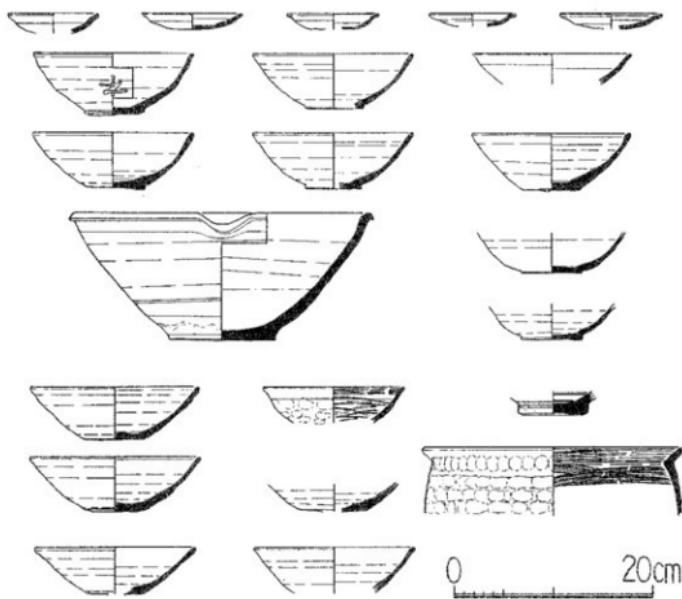
中世のころのお墓のようす  
『餓鬼草紙』より



竪穴住居址での生活のようす

『吉野ヶ里』より





二葉町遺跡第7次調査  
出土遺物実測図

自分でほり出した土器と図面や見本に並べてある土器と  
よく見くらべてください。

若松町遺跡の付近で  
最近調査された遺跡の  
出土遺物です。

# 地下に眠る道場の歴史展

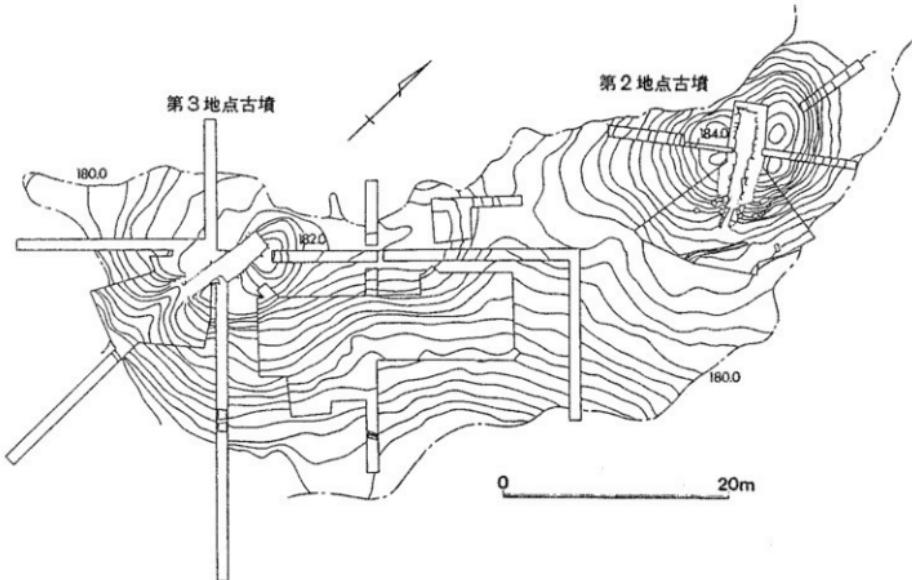
## —北神第2地点古墳と第3地点古墳—

神戸市教育委員会  
平成10年11月2日・3日

道場は、古くから交通の要衝であり、日本海に抜ける国道176号線や、三木方面に抜ける県道神戸三田線など、現在でも主要幹線が町内を通っています。また、長尾川・八多川・有野川・有馬川が合流して武庫川に流れ込む地点でもあり、これらの河川は、農耕に適した平地を形成しました。道と川は、人・物・文化を運び、その交流の中から道場の歴史は始まりました。それは今から約2000年前の弥生時代のことです。

今回展示しているものは、今から約1450年前の古墳時代のもので、北神第2地点古墳と第3地点古墳から出土した遺物です。これらの2つの古墳は、道場を見下ろす丘陵の上に築かれています。この丘陵では6基の古墳が調査されていますが、同じ時期に造られた古墳はありません。このことから、この地域を治めていた有力者が、次々と葬られた場所であった事がわかります。





第2・第3地点古墳測量図

第2地点古墳は6世紀中ごろの古墳です。直径約17m、高さ約2.5mの円墳で埋葬施設は南東方向に開口した横穴式石室です。遺体を納める部屋（玄室）の天井は失われていますが、約2mの高さがあった様です。石室に使われた石材は、この付近で取れる加工のしやすい石（凝灰質砂岩）を使っています。玄室の中は土が流れ込んだり、掘り込まれたりしたため、お供えに使われた物はほとんど残されていませんでしたが、玄室へ続く部屋（羨道）からは、当時に置かれたままの状態で土器が見つかりました。その他に鉄のやじりや装飾品などが出土しました。また石室の入り口で大きな土器が碎かれた状態で見つかり、死者のためのお祭りをした跡と考えられます。

第3地点古墳は6世紀中ごろの古墳です。全長約36mの前方後円墳で、埋葬施設は南方向に開口した横穴式石室です。天井石は失われていますが、約2.5mの高さがあった様です。石材は、1号墳と同様、凝灰質砂岩です。見つかった遺物はわずかですが、土器の破片のほかに、鉄のやじりや馬具、ガラスの小玉などが見つかりました。玄室の石材に「○」印が掘り込まれており、非常に珍しいものです。

現在、この2つの古墳は整備されて自由に見学できるようになっています。神戸電鉄道場駅のすぐ北側ですので、一度訪ねてみてはいかがですか。

## 須磨区の歴史

前回（今年5～6月）は、戎町遺跡と大田町遺跡を中心に展示をしました。今回は、最近発掘調査した中で、天神町遺跡と権現町遺跡のものを加えて皆さんに見てもらおうと思います。

前の展示の時に、須磨区の境りあたりで今から約1万年前の土器や石器が見つかっていることを紹介しましたが、そのときには実際に石器などを持ってくることは出来ませんでした。しかし、今回ちょうど調査をしている天神町遺跡で、この10月に同じ時代の石器が見つかりました。



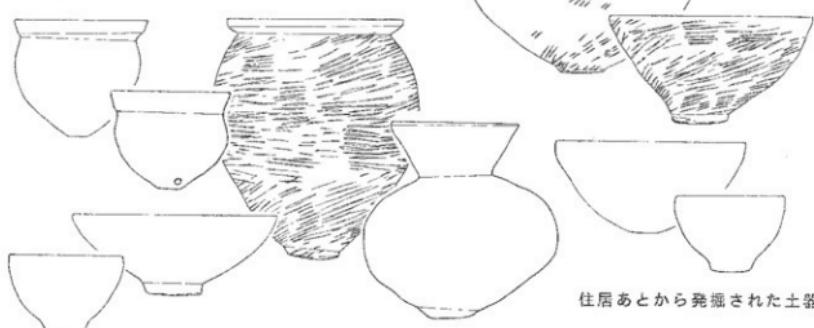
★左の絵のような形をした石器が、最初にありますね。これが、今から約1万年前のもので、動物を狩るためのヤリ先だと考えられているものです。

吉くおなせき ぞっさ

←局部磨製石器と言います。

寺田町3丁目（戎町遺跡）で見つかった、約1800年前の住居あとは、一辺4mの四角形で床面に炭化した柱などが残っていたことから見て、火事にあったようです。使っていた土器を選び出す余裕もなかったのでしょう、土器がそのままの状態で残されていました。

（上の写真を見てください。）



住居あとから発掘された土器



★板宿駅の南（平田町3丁目・戎町遺跡）からは、約1700年前のアクリセサリー、勾玉が見つかりました。どんな人が身につけていたのでしょうか。ムラの長のような人物でしょうか。興味がわきます。

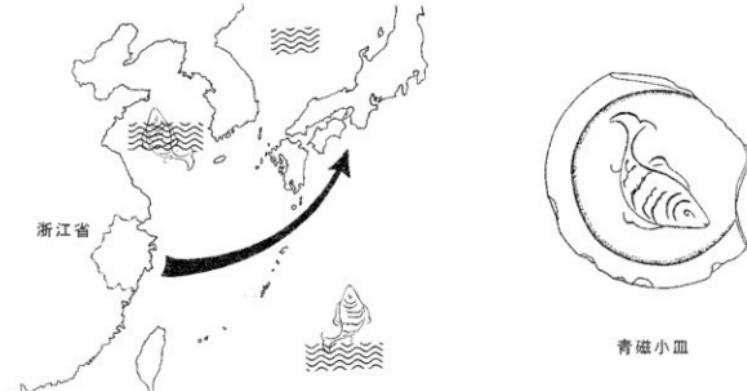
天神町遺跡では奈良時代終わりころの、権現町遺跡では平安時代中頃の屋根瓦が発掘されました。その頃、瓦屋根の建物は少なく、お寺や役所、一部の有力者の家などに限られます。瓦が出てきた場所に何が建っていたか、まだよく判りませんが調査が進めば、段々と明らかとなっていくことでしょう。



★出土した瓦のなかで1つ面白いことがあります。西区の神出と言ふ所では、平安時代から鎌倉時代にかけて瓦を焼いていましたが、権現町遺跡から出た瓦にこの神出で作られた瓦とそっくりのものがあったのです。これから900年も前に神出産の瓦がここ須磨まで運ばれてきたことが明らかとなつたのです。

破片を復原するとこのようになります。

「運ばれた」と言えば、800年前にもっと遠い所から運ばれたものがあります。それが次にある魚の文様があるお皿（青磁小皿）です。これは今の中国浙江省で焼かれたものです。当時の中国（南宋時代）との貿易で日本に輸入されたものなのです。



このように、瓦のカケラや陶磁器の破片でも詳しく調べていけば、昔の須磨に住んでいた人々がどこの地域の人達とかかわりを持って生活をしていたのか、というような事まで判ってくるのです。

#### 『須磨区の遺跡』展

- ・場所 若宮小学校
- ・会期 平成10年11月14日～12月1日
- ・主催 神戸市教育委員会 文化財課

# 宮川小学校と周辺の遺跡

宮川小学校は、今回の震災で大きな被害を受けました。そこで、校舎を建て替えることになり、それに伴って地下の遺跡の発掘調査を行いました。この辺りは「長田神社境内遺跡」の範囲です。この遺跡は大正13年に神社の境内から弥生土器などが発見されたことからこう呼ばれています。

今回、校舎の竣工式を迎えることができ、この機会に小学校の発掘調査で出土した物と以前に調査したもの的一部を展示します。以下主なものについてご紹介しましょう。



後期  
縄文時代  
土器



青銅鏡



◆区内で最古の土器は、名倉町で見つかった縄文時代中期須須

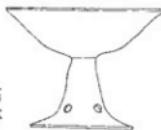
(今から約4000年前) のものですが、大塚町1丁目の調査でこれよりやや新しい後期初めの土器が出土しました。

◆長田町1丁目や大塚町1丁目では、縄文時代晩期(今から約3000年前)の土器や弥生時代後期(今から約1900年前)の住居址なども見つかっています。六番町の長田中央市場の地下からは、直径約6cmほどの青銅の鏡も出土しました。

宮川小学校で出土したものは、垂水にあるあの巨大な古墳、五色塚が作られた時から、約50年ほど経った頃(古墳時代中期、今から約1550年前)のものと、今から約800~400年前(鎌倉時代~室町時代)のものが中心です。



壺



高杯



小盤丸底壺



壺

◆古墳時代中期の土器の中には、

より用と考えられているものが多くありました。当時の人々は何いのを祈っていたのでしょうか?

このほか、「韓式土器」と呼んでいる朝鮮半島で出土するものと大変よく似た土器が、見つかっています。2300年前に日本人にお米を食べることを教えたのも朝鮮半島の人達でした。1550年前のこの韓式土器も、当時の人々と朝鮮半島の人達との交流を証明しています。



須恵器 梶

中国宋時代の貨幣



(九九五年鑄造)  
至道元宝



(一〇五四年鑄造)  
至和元寶



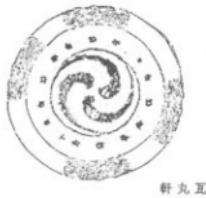
(一〇五四年鑄造)  
大觀通寶



(一一〇七年鑄造)  
政和通和

(一一一年鑄造)

◆鎌倉時代～室町時代の食器なども沢山見つかっています。それらの中には、西区神出あたりで作られたと思われる須恵器



軒丸瓦

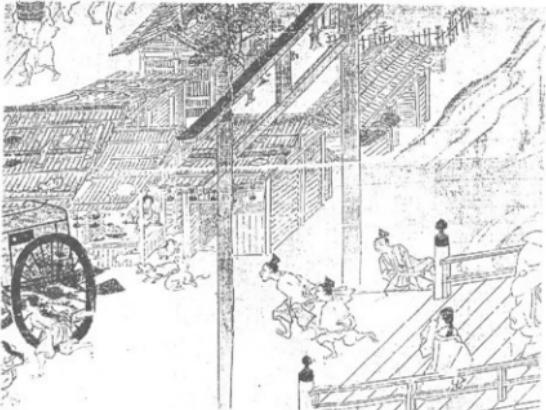


軒平瓦

◆いろいろな文様をついた屋根瓦もありました。当時描かれた

絵巻物を調べると、この頃の庶民の家の屋根は板葺が一般的で

瓦を屋根にのせるのは、寺社や一部の有力者の家だけだったようです。



『一遍上人繪伝』(鎌倉時代)に描かれた京都四条大橋近くの民家

以上、少しですが展示品について説明しました。これらのものは当時の人々の暮らしむりを知る手がかりとなるものばかりです。

皆さんも昔の人達がどのような生活を送っていたか、想像してみてはどうでしょう。

#### 『宮川小学校と周辺の遺跡』展

- ・場所 宮川小学校
- ・会期 平成10年11月14日～12月1日
- ・主催 神戸市教育委員会 文化財課

## 平成9・10年度 神戸市遺跡現地説明会資料集

平成12年3月 印刷

平成12年3月 発行

発行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5-1

☎ 078-322-5798

印刷 (有)アローア印刷

神戸市中央区中町通2丁目3-8

☎ 078-371-3831

---

神戸市広報印刷物登録・平成11年度 第348号（広報印刷物規格 A-1類）



本書は、再生紙を使用しています。